毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢



明治二十九年三月十日發兌

第七拾參號

再版

露西亞帝國

平田久著

紙數 四百七十三頁
定價 卅五錢 郵税六錢
肖像 露帝ニコラス二世
地圖 露西亞の膨脹
中央亞細亞の進畧
パミール高原
悉比利亞鐵道

各新聞の批評

◎時事・・・・ 著者の言葉に曰く今日の時勢に於て露西亞の事情を隔して日本の事情を知る所にして之を學ぶは學問の爲めにあらず實に我等生活の必要に因れりと即ち此書は能く時勢に亞帝著はしたるものと云ふべし著者は平田久氏なり

◎教育時論 四百五十六頁の大冊子、是れ平田久氏が露西亞と國研究の隙渉吳腐たらんとを期して、著したるもの。地理あり、歷史あり、國民の特質あり、日本國民の心得して必一讀すべく、將來露西亞帝國研究の途に上らんと欲するものも、讀んで以て其方針を確定すべし。

◎毎日・・・・ 東洋に事多く、遂に露西亞が東洋の政治舞臺に其腕を振はんとする傾向あるに至りしより、露國のとを談論するもの、著述するもの少しとせず。然れども始終相應し 所謂確實なるもの、所謂完成の著述未だ世に公にせられしとなし。然るに頃日民友社員平田氏の著述にかゝる「露西亞帝國」てふ大冊(四百七十三頁)出で、漸くこの感去る、可喜可喜。」今まこの「露西亞帝國」を閲するに、露西亞…………の諸問題に就き頗る叮嚀に論辯されぬ。文章の美、徵證の周到なるには感服の外なし。著者がこの大文字をものせんとて費されし研究考證の勞は定めて容易ならざりしならん。バルカン、印度、朝鮮問題に付き著者の論述されしうちには(六六ページより三〇三まで)、露國に於て曾て耳にするとを得ざるとを多く甚面白し、且つ最も有益ならん云々

◎基督教新聞・・・・ 筆を露西亞の天然に起し其膨脹力、同化力を說きて國民に及び卷頭新帝尼格第二世を總論として掲げ附るに肖像を以てし卷中露西亞膨脹地圖中央亞細亞侵略地圖「パミール」高原地圖悉比利亞貫通大鐵道地圖を挿む全篇四百五十六頁章を別ち節を立つる頗る詳材料の豐富なる優に推して近來の好著と謂ふべし云々

◎神戶實業新聞・・・・ 露西亞てふ名稱は今や我が國人に一種言ふ可らざる感情を惹起し對露西亞策なる者は實に我邦朝野の間に於ける最大至重の問題となり將來に於て我が帝國の國是方鍼を一定するは一に此問題の解釋に待たざる可らす左れど今若し對露西亞策を講ぜんと欲せば須らく露西亞の以て露西亞たる眞相を知るとを要す……『露西亞帝國』の著者は能く時勢の須要を察し敢ふてこの知り難き露西亞帝國の眞相を究めて之を我が國人に紹介せんことを試み而して又能くその目的を達したると言ふことを得べし…………惟ふにその材料の拾收撰擇は是れ著者が最も苦心を用ひたる所なるべく文章流麗布置亦その當を失はず就中露西亞國民を論ずるの一篇五章は當時佛國經濟學者の泰斗たるポール、ルロアー、ボーリウの同胞にして最も露西亞の形勢事情に精通せるを以て其名聲歐洲諸學者の間に籍甚なるアナトー、ルルロアー、ボーリウ氏の原著を露人ラコジン氏が飜譯評註したる『ザール帝國及び露西亞國民』に本きてこの奇怪不可思議なる露西亞國民の性質、氣風、素養、慣習を說明して最もその詳を極む全文の光彩實にこの一篇に在り云々

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

水上梅彦編纂

日臺會話大全

定價三十錢　郵稅四錢

◉東京朝日評　日本と臺灣の會話大全といふことなるべきも臺灣は已に日本版圖内に在り今日にては何となく妙に聞ゆ併し書中の會話は隨分汎く蒐めありて（其誤謬のあるや否やは知らず）其序文の冒頭に本著の期する所は厦門俗語を學修せんと志す初學者の階梯たらんとするに在ると見ゆ以て本書の價値と便益の在る所を知るに足るべし

◉中央評　印刷體裁極めて雅麗中身の價値蓋し之に稱へるならん吾人多く臺語に通せず細評に及ばず

◉都評　臺灣には我國語を用ゐしむべきものなれば强て臺灣を習ふの要なきが如しと雖も臺灣人を敎化せしむるには先づ彼の國語をも知らざるべからず此書以て其指針と爲すべし

◉自由評　體裁甚だよく時節柄必要の書定價は僅か三十錢

◉朝野評　今や我國民は臺灣を知らざるべからざるの一大義務を有す何となれば、臺灣は實に我領土なればなり、我領土は即ち我國、我國は即ち我家、我家は即ち我身、之をして等閑に附するを得ば天下何物か克く愼重の顧念を要するものあらんや、日臺會話大全著述の意蓋し此に外ならざるべし、若し夫れ著作の體裁、言語の當否は、由來臺灣語を知らざるの予輩は謹んで緘默の德を守らん耳、

◉東北日報評　日用對話、諸般の會話、商品條目及商業用語、日臺いろは辭典の四章より成り總べて三百四十八頁序文にも見ゆる如く厦門俗語を修得せんとするには實に必須の書なり

德富猪一郎著

再版

國民叢書第九冊

家庭小訓

定價拾貳錢
郵稅　貳錢

「日本」の評　著者蘇峰子の實驗より得たるものを平易に書き流したる小冊子なり子の理想にあらずと雖も子の理想亦以て覗ふに足るべし

「日々」の評　德富蘇峰氏近業中家庭に係る小品を蒐錄して一篇となすもの篇々玉の如く藹然たる深情を含む別に經營慘澹の迹なきも其の實益の點に至りては他の切齒扼腕的文章の比にあらざるべし

「經濟雜誌」の評　著者の自白する如く本書は分りきつたる事を說き出したるものなれども、道がは蘇峰氏の文たけありて趣味津々として紙上に溢れ、覺ねず卷を終らしむ、古語に曰く、日光が水晶を透過して五色の光彩を放つが如く、尋常茶飯の事柄も天才の錦心繡腸を透過するときは異彩を生ずと、余輩は本書に於て此語の欺かざるを見る

「早稻田文學」　德富蘇峰氏が小引の意にいはく「世には其の言ふ所、匹夫匹婦も合點するも、大人豪傑すら之を行ひ得る難き事有之候、本書筑く所の如き或はその一斑かと存候、斯る意見は其の議論よりも寧ろ論者の如何によりて價値は定まるものにて候、著者が江湖の君子に向て一讀の勞を要請するは自から言ふ所を能く實行する程は參らざるも、聊か自から行はんと欲する所なるが故に候」と、以て此の書の價値と性質とを知るべし、家庭の細大を三十六項に分かちて絮說せり、「美はしき家風」の條下に、「若し夫れ一家の異分子に到りては無きに若くなし、即ち食客、厄介者等の如きは成る可く居らぬに増す事なし」などいへる所、著者の家風を想ひ見るべし、「夏の樂み」の章など、詩趣また味ふに足れり

「報知」の評　蘇峰子が理想より家庭を理むるの樂と爲るべき訓則十數條を示せり父慈子孝、夫唱婦隨、淸き家庭を作るの心掛けとして服膺すべき言多し

發兌元　東京京橋區日吉町　民友社

民友社出版書籍

社會叢書

- 第一卷 海の日本人 定價十錢 郵税二錢
- 第二卷 簡易生活 定價十錢 郵税二錢
- 第三卷 娯樂倶樂部 定價十錢 郵税二錢
- 第四卷 事務世界 定價十錢 郵税二錢

青年叢書

- 第一卷 武備教育 定價十二錢 郵税二錢
- 第二卷 遠征 定價十二錢 郵税二錢
- 號外 本朝美術 定價十二錢 郵税二錢
- 第三卷 市民 定價十二錢 郵税二錢
- 第四卷 職業論 定價十二錢 郵税二錢
- 第五卷 技術 定價十二錢 郵税二錢
- 第六卷 學校生涯 定價十二錢 郵税二錢
- 號外 松原岩五郎著 征塵餘錄 定價十五錢 郵税二錢

家庭叢書

- 第一卷 家庭の和樂 定價十錢 郵税二錢
- 第二卷 夏の家庭 定價十錢 郵税二錢
- 第三卷 玩具と遊戲 定價十錢 郵税二錢
- 第四卷 家庭教育 定價十錢 郵税二錢
- 第五卷 小兒養育 定價十錢 郵税二錢
- 第六卷 家庭衛生 定價十錢 郵税二錢
- 第七卷 家政整理 定價十錢 郵税二錢
- 第八卷 簡易料理 定價十錢 郵税二錢
- 第九卷 社交一斑 定價十錢 郵税二錢
- 第十卷 婦人と職業 定價十錢 郵税二錢
- 號外 家庭と理財 定價十錢 郵税二錢
- 號外 名士と家庭 定價十錢 郵税二錢

平民叢書

- 第一卷 十九世紀の大勢 定價十二錢 郵税二錢
- 第二卷 世界經濟上之變動 定價十二錢 郵税二錢
- 第三卷 國家と政府 定價十二錢 郵税二錢
- 第四卷 教育と遺傳 定價十二錢 郵税二錢

明治廿九年三月十日發行

家庭雜誌第七拾參號

目錄



家庭雜誌第七拾參號

（明治廿九年三月十日發兌）

社說

人間の曉光

鷄鳴東天紅を告ぐるの頃より、日出に至る迄の天地は、如何に莊嚴なるよ、如何に雄渾なるよ。如何に清美なるよ、如何に深遠なるよ。

太陽は、古るし、幾萬年前より存在するや、人の想像すら及ばず。然れども彼れは日々新なる顏を以て、新なる色を以て、新に地平線上に生るゝなり。人々よ、太陽は汝の敎訓なり、太陽は汝の模範なり。人間は弱き者也、罪に瀆がれ易し、惡に染み易し。心頭には誘惑の雲あり、悲慘の雨あり、憤怒の風ありて、汝を亂すとあるも、一日をして一日を送らしめよ、昨日をして昨日を葬らしめよ。朝は、必ず太陽の如く新なれ。新なる光、新なる色を以て、新なる一日を迎へよ。人間は小乾坤也。宇宙の曉光は、人間の曉光也。如何なる惡人と雖、睡眠に由りて、全く其罪を忘れ、全く其惡を忘れ、全く善人と同き境界、聖人君子と同じき境界に入りて、而して然、初めて醒むるの瞬間は、必ず太陽の新なるが如く新なる光あらん。此の光こそ、人間の生命なれ、此の光こそ、人間の死する時に最も輝く光なれ、此光こそ未來永刧のエテルニチーに合するの光なれ。此光を長に留めよ。惡魔の爲めに踏み消さるゝ勿れ、此の光の長く輝くは、善人のみ。忽ち消ゆるは惡人のみ。

故に朝は、一日の中最も貴き者也。夕の一時間は、砂也、朝の一時間は黃金也。最も大なると、最も善なるとは朝に於て、之を企てざる可らず。朝の水は清よし、朝に酌まずんば、夕に濁るを如何せん。

然るが故に、早起の家は勤勉を意味するのみならず、健正清淨を意味す。晩起の家に至りては、即ち其反對を意味す事小なりと雖、關する所は大也。

交際の道

極貧の家と女多き家とには、屡々出入すべからず、主人留守の家に長居すべからず、主人欠伸せば、はやく立つべし、人來りて問ふことありても、志他にあらば、詳に說くべからず、吾が好む事なりとも、人の好まざる事をば語るべからず、朋友にも親切の意見、再三にして聽かずんば止むべし、我なすべしと思ひ立ちたることは、明日ありと思ふべからず、貧しき人は疎みやすく、富貴の人は親みやすく、金銀にのぞみては、爭心起るものと知るべし（梅園叢書）

科學、

植物學

松ケ枝

廣き宇宙の萬物千差萬別限りなけれど大別すれば動物、植物、鑛物の三種に歸すなり、

春の光りは將さに綠りの敷物を全地に送らんとはすなり野、山、谷の草、木、苔は吾人を誘ふて戸外に出ださしむべし、

即ち植物、は吾人の視線達する限り何處にも見らるゝなり徒らにこれを眺むるすらたのしければ況してその玄妙の理を知りて之れを見るの快樂如何ならん植物學など云はゞ何となく難澁なるやう思はるべけれどこゝに最も簡易なる學び方あり英國「ケンブリッヂ」大學敎授にて有名なるヘンスルー博士曾て田舍の無學なる兒童八歲より十四歲までなるを集めて敎授せしに最も成効ありしといふ即ち彼の敎授せし方法に從ひ左に揭ぐるなれば願くは未だ植物學に初步の小兒方此れを見て自ら學ぶの扶けともし給はんか。

數學の推理力に於けるが如く植物學は觀察力を養ふに最も効あるものなり

葉

植物の三大機關は根、幹、葉、にして各千差萬別の形狀官能を具ふれど就中葉は他の二機關を合したるよりも一層多く種々なる形ち、種々なる目的を有するものなり梅、櫻、椿等の葉は何人の目にも葉と見ゆべけれど是等尋通葉以外或る特別なる用を達せんが爲め變形するものありそれは逐次説き明かさん、
先づ戸外に出で一の葉をとり來り圖(1)に比べて葉の各部の名を覺へよ、

課程、(一)



第一圖

(い)葉面――葉の重なる部即ち扁平なる綠色の部分にして一面は自然に天に向ひ他の一面は地に向ふものなり

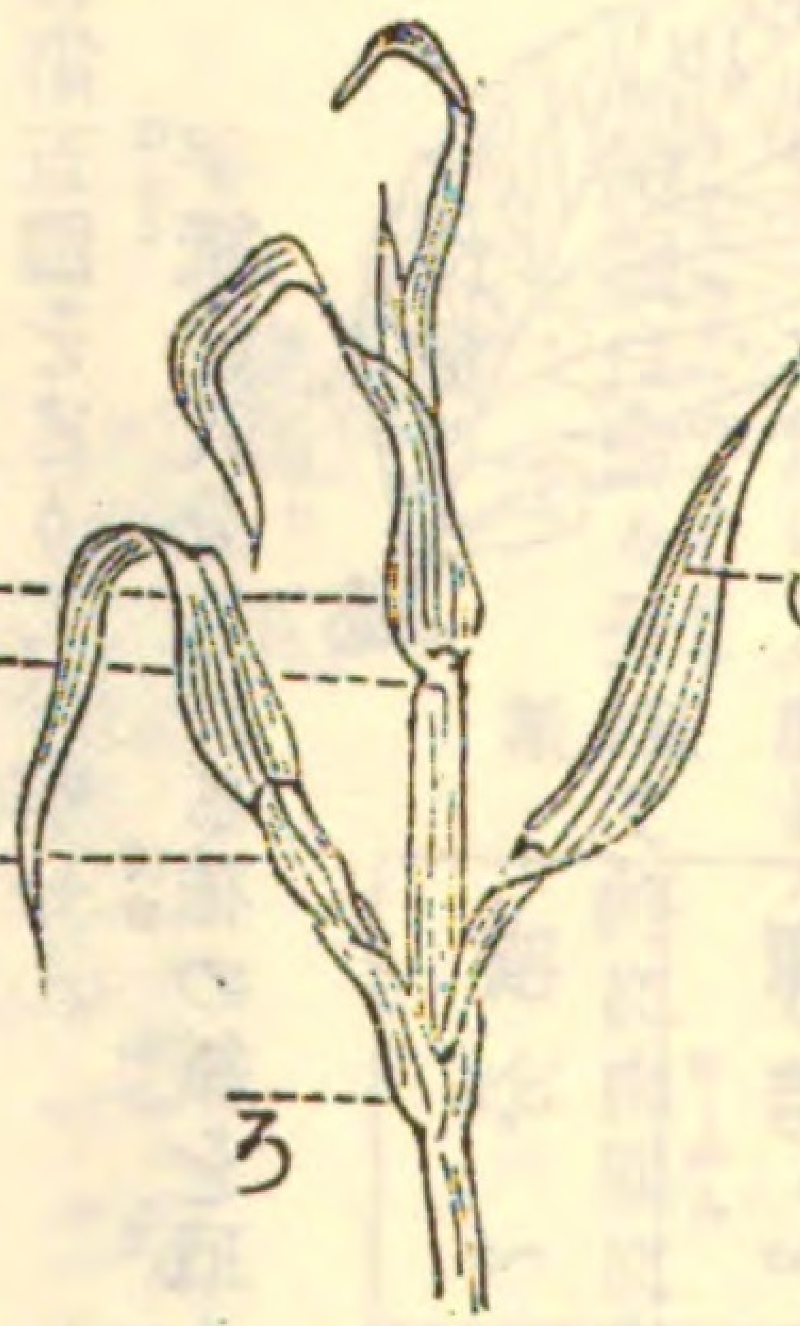
(ろ)葉柄――葉面の柄にして通常少しく圓柱狀をなす、

(は)托葉――葉柄の脚部にある小さき軀にして小さき葉の如く見ゆるものなり

尋通葉の完全なるものは葉面、葉柄、托葉の三部より成り葉面最も重要なる部分なり

課程、(二)

禾本類



第二圖

(い)葉面――葉の扁平なる上部、

(ろ)鞘――莖を圍み居る細長き葉

梗

(は)舌――鞘と葉面と結び付く所に見らるゝ薄き膜狀のもの即ち托葉に對するものなり

課程、(三)

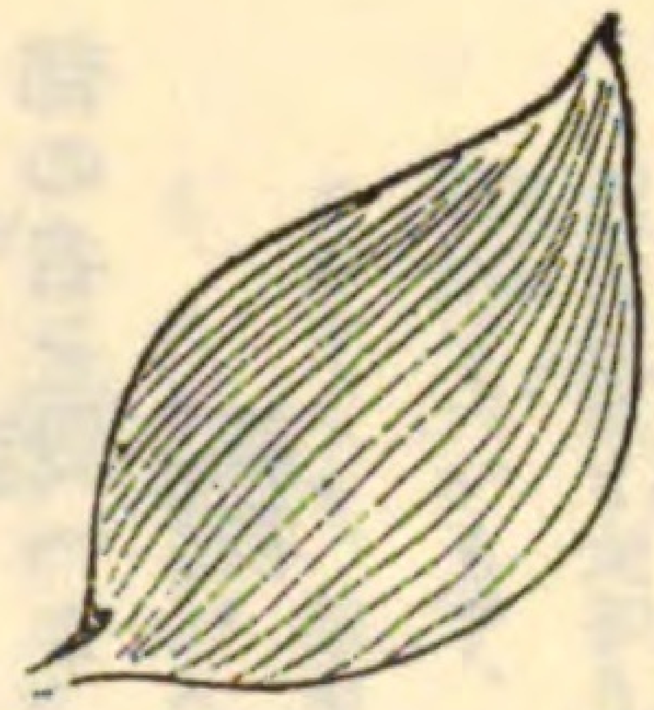
脉狀



第三圖

葉面の上に見ゆる線の模樣を脉狀と云ふ

一枚の葉をとり上げて御身の眼と日光との間に捧げ第三圖の如く葉面上に不規則なる線の網細工をなすを見なばこれ網狀脉なり然れども若し第四圖に於ける如くかゝる網狀を見ざるときは之れを並行脉葉と云ふ



第四圖

畑地多き處に育ちたる童兒女子誠に數多しされども若し試みに彼等に向ひ「いも」の葉と豆の葉との區別を問はゞ答ひ得ざるもの多からんこれ彼等は幾度も「いも」や豆の生ぜしを見たるなれど只だ見たるのみ曾て之を觀察せし事なき故なり觀察とはよく考へて見る事なり一物を觀察するときは吾人只だ徒らにそをながむるのみならずそのものにつき格別に考ふるなり假令ば御身方この課程を學びし後ち圖に出でゝ一の葉を見なば忽ちその如何なる部分を有するか又網狀なるか然らざるかを考ふるなるべし即ち細かにその葉に付きて觀察するなるべし

今一の網目表を作りて學びなば極めて面白からん試みに第五圖をとりて分解せん

半紙を八分したる程の紙を取りて



第五圖

部分？	葉面 葉柄 托葉
脉狀？	網狀

右の如く線を引き左の方には問をかゝげさて持ち居る葉に付きよくしらべその如何なる部分を有するか又如何なる脉狀なるかに從て右方その問に對する處に右の如く



第六圖

答をかくべしかくてそのとり來りたる葉をば各その紙の上にとめ置きて植物學を知れる人に見せもし誤りなきかを尋ねよ、

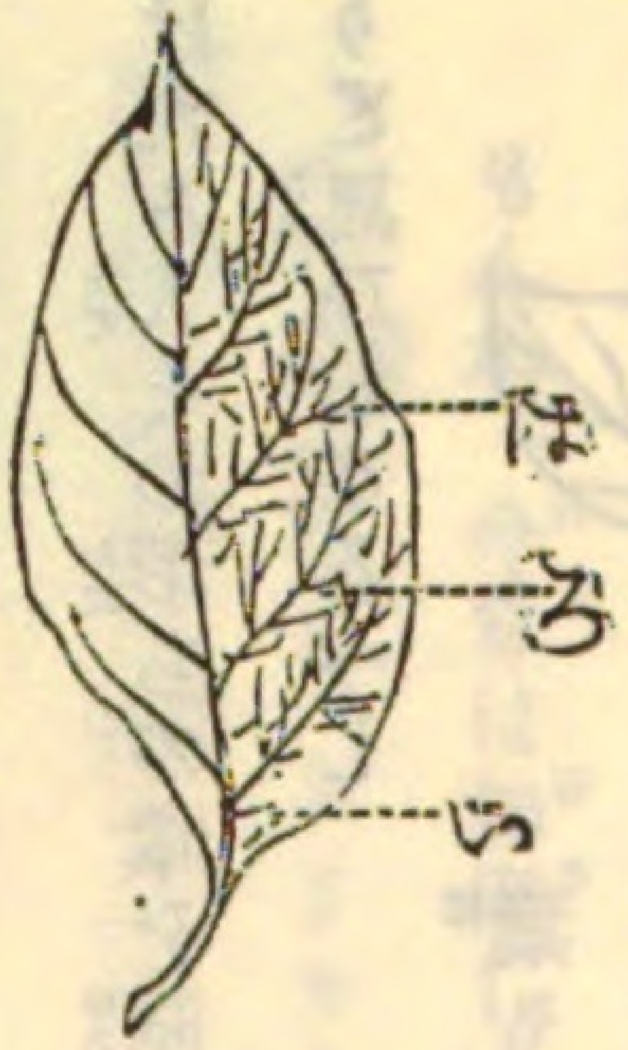
課程、（四）

葉の構造及びその部分



第七圖

第六圖の葉面上にある線は葉の構造より成るなり第七圖にて黑色になり居る是等の線の間の塲所は眞の葉にては綠色なる肉部なり



第八圖

御身等己に葉の部分の名稱を知り給へり次の二圖は構造各部の名稱を示すべし第八、九の圖をよく見るべし

（い）肋——葉柄に始まりて葉面を貫通する葉の構造中最も堅牢なるものを肋と云ふ



第九圖

第八圖に於けるが如く肋只だ一條中央にあるときは之を中肋と云ふ、（第九圖の（い）は肋なり）

（ろ）脈——肋の分派せる枝を脈といふ

（は）小脈——脈の更らに分派せるものなり（細脈は愈々分れて終に肉眼にて見るべからざるほどに至る）

課程、（五）

羽狀脈葉及び掌狀脈葉

生きたる數個の葉をとり來り圖の（八）と（九）とを以て注意して較べなば必ずや肋と脈との區別を明らかに知り得べし

今一の葉に只だ一條の肋即ち中肋のみありて第十圖の如く脈を右と左とに分岐し恰も羽の如く見ゆるもの之

を羽狀脈葉と云ふ又第十一圖の如く數個の肋葉面を横ぎりて居るときは之



第十圖

を掌狀脈葉と云ふ誰なるか最初之を名付けたる人その形ちの掌を開きて指を擴がしたるに似たりと思ひしなるべし



第十一圖

葉もし網脈なるときは必ずこれら二個の中何れかに屬すると知れ、脈狀の問に答ふるとき御身の持ち居る葉の羽狀脈葉なるか將た掌狀脈葉なるかを網目表上に記せよ、葉面の基底に近き大なる脈甚しく肋に類似する事あるを以て時には葉の果して羽狀なるか掌狀なるかを辯じ難き事あるべしされど圖と定義とを以てよく御身の學ばんとする葉に較らべ網目表上に御身の意見を掲げよ始めは誤まる事もあらんされど愈々觀察し愈々學ぶに從つて正しく知るに至らん

家内繁昌の妙藥

正直篤實を合せ百匁、忠孝、身を粉にして百匁、儉約しつそにして一斤、五常、仁義禮智信と能々いりて五兩目、堪忍、五兩目右の藥調合に念入毎日朝起して慈悲の袋に入れ、あしき友を除き水一生を入れ案じ用ゆべし、驕りたるをよく〳〵すまし費を省き用ゆ、これ延壽長久の良藥なり、用ゐて其功能をしろべし○禁物――色と酒と慾、其外一切差支なし

文藝

狸の話（中）

園部紫嬌

子狸は、兎の子に散々いぢめられた腹立紛れに、木の

株や、藤の蔓杯を引掻き廻はして、穴へ歸ると、狸の親は待つて居て、

親狸『この餓鬼やア、何處をまごついて居やがつた、日の暮れるのも知らねいで。

子狸は、腹の立つてる處をば、又叱られたのだから、悲しくつて堪まりません。シクリ／＼と泣き出しますと、親狸は、初めは叱つても見たが、畜生でもソコは親子の情です。今度は言葉も柔しく

親狸『小坊、どうした。叱られたつて、泣く奴があるもんか。今日は如何して遊んだ。ナニ隣りの兎ちやんと遊んだと、ソリヤよかつた。

少し甘い言葉を掛けると、小供です、スグに機嫌が直りまして、

子狸『父、あの隣の兎ちやん處には、いろんな藝があるつて、本當かい。

親狸は、何の氣も附ません、尋ねらるゝまゝに、

親狸『ア、、兎公は、なか／＼、えらもんさ。餅なんか獨りで搗くからな。

子狸『そう、それじや、マルで人間見たいだねー。そして、夫れから。

親狸『ソレから段々年を取ると、兎公は月の宮へ昇ることが出來る。本當に羨やましい奴ぢやねい。

子狸は、フム／＼といつて、聞いて居たが、突然に

子狸『そんなら、父は如何な藝が出來るかい。餅は搗るかい。

親狸は於是乎、ハタと行き詰りました。固より狸ですから徒らは隨分達者にやりますが、兎のやうに餅搗なんか、出來は致しません。親狸どの大に困りましたが、何んとか答辯せねばなりませんから

親狸『餅搗なんか、あんな詰らねいものは、如何でもい、、己等は、化ることが出來る、人間にでも何にでも、スグに化られるから、不思議サ。

子狸は大に嬉しさうな顔付にて

子狸『そう、そいつはうれしいな。ソレを隣の兎ちやんはね、己等の先祖や父を馬鹿にして、頓間だの、間抜けだのッて、さん／＼ッぱら、己等をいぢめたよ。

親狸は、につくき兎の振舞かなと非常に腹を立てましたが、兎には先祖を初め、やッつけられて居りますから、滅多に手出しは出來ません、といつて、子供の手前弱い言をいひません。ソコで一遁辭を設けまして

親狸『ナァに彼奴は、馬鹿だから、ソンナ事をいふんだ。……馬鹿にからかうと此方も馬鹿にならァ、打つちやつておけ。

子狸『ソレでも家の先祖が、兎ちやんの先祖にいぢめられたッていふぢやないか。

親狸は、マサカ此樣事迄は知るまいと思ひの外、家の恥を聞かせられて來たのだから、此の答辯はどうしても出來ません、ソコで極ボンヤリと

親狸『ウム、ソンな事があつたか知ら

そうしますと子狸は

子狸『それぢや、ソンな事はないんだね。

親狸は心もとなげに、

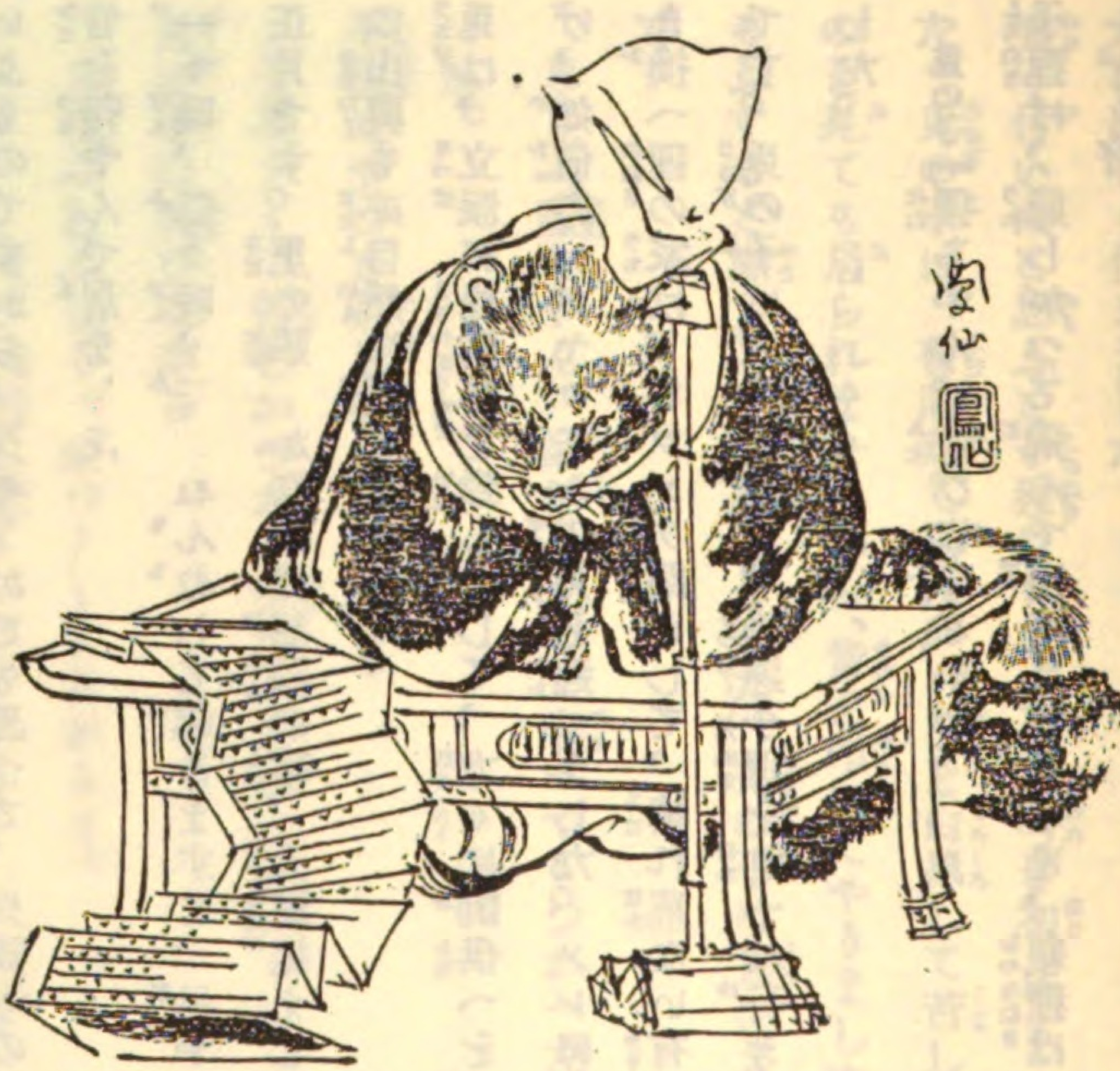
親狸『ア、、

話の中に夜はだん／＼更け行きまして、峯の嵐も、音を靜めました。親狸は、コレからが己等の仕事のし時と思ひましてか、子狸を寐かしまして、人里ある方へ、大急ぎに走つて行きました。大方塒の鷄でも盗みに行つたんでしやう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

子狸が兎の子にいぢめられてから、かれこれ三ッ月が程經つて、其の歳も暮れました。スルと此の世界でもお正月を迎へますことゝて、何となく其準備に忙しそ

うに見へます。取別、兎の家では、忙しう御座いまして、朝から晩まで、齷齪して居ります、軈がてお正月にモー三日といふ晩には、親類中の兎が、集りまして



ペッタンコ〱と餅搗を初めました。
サア、堪まらない、隣の子狸は、兎の家の盛な有様を見て、急いで親狸を呼び起しました。
子狸『父、早く起きて、起きてッてば、隣は大騒ぎだよ。
寐て居ました親狸は、目を摩りながら、起き上つて、欠伸を二ッ三ッ、寐ぼけ聲で、
親狸『ナ、ナンだ。
子狸は焦慮たがつて
子狸『父なんだつて寐てなんで居るんだい、隣りぢや、モ、モチ搗だよ。
親狸は、コイッ一番困つたと思ひましたが
親狸『餅搗……ソリヤ兎公の商賣だ、己等の家風にやあんなことはねいよ。
先づコンな事をいつて誤魔化しました。子狸は正月、何處でも餅を搗くのに、家許り搗ないのは、おかしい

と思ひましたが、親狸がソレは家の風にないことだといふものですから、又そうかとも思つて、只隣りの杵音を羨やんで居ましたが、

一ト晩、二タ晩、三ねんねして起きますと、早やお正月です。里の賑かなのは無論の事、人跡絶えし此の山奧も亦自然に春めきました。

兎は、立派に松飾杯を致しまして、方々に御供へを上げ、如何にハデヤカなお正月を迎へました。ソレに引き換へ狸の家は、ヒツソリ閑として、憐れ墓ない有様です。兎の子は之れを見て、早速子狸を迎へは行きました。

兎の子『狸ちやん、遊びに來ないか。

子狸は、嬉しがつて飛んで出やうとすると、親狸は急に呼び留めました。

親狸『よせ、行くときかねいぞ。

子狸『なぜ。

推問答して居ると、外では又も聲高かに、

兎の子『狸ちやん、お出で、餅をやるから

餅と聞いて、子狸矢も盾も透らばこそ、一目散に穴を飛び出すと、兎の子は待つて居て、

兎の子『如何だい、お正月だつていのに、お前の家ぢや、お飾もしねいぢやねいか。

子狸『そうさ家風にねいもの

兎の子『家風だなんて、生意氣な事をいふな。ソンな事いはねいで、己等とこの餅でも喰つて見や。

兎の子は、一片の餠を子狸にやりました。子狸は、生れて始めて餅を見る事ですから、不思議そうに眺めて居ました。

子狸『これが餅ていもんか。

兎の子は笑ひながら

兎の子『そうよ、甘いぜ喰つて見や。

子狸は、敎へられて始めて餅といふものを知り、如何

んなに甘からうと思つて、初めはチヨイと噛りました。スルとなか〳〵甘い。甘いものですから、二度目には、大口に噛り付きました。

噛り付いたと思ふと子狸はヒー〳〵と叫き初めました。兎の子は、暫時見て居たが、目を白黒して苦しむのを見ても居られませんから、背を叩いてやりました、そふすると漸〳〵元に歸りました。兎の子は喜びまして

兎の子『狸ちやん、如何したの、喉へでもつかへたのか。

子狸『ア、、苦しかつた、喉がつまつた。

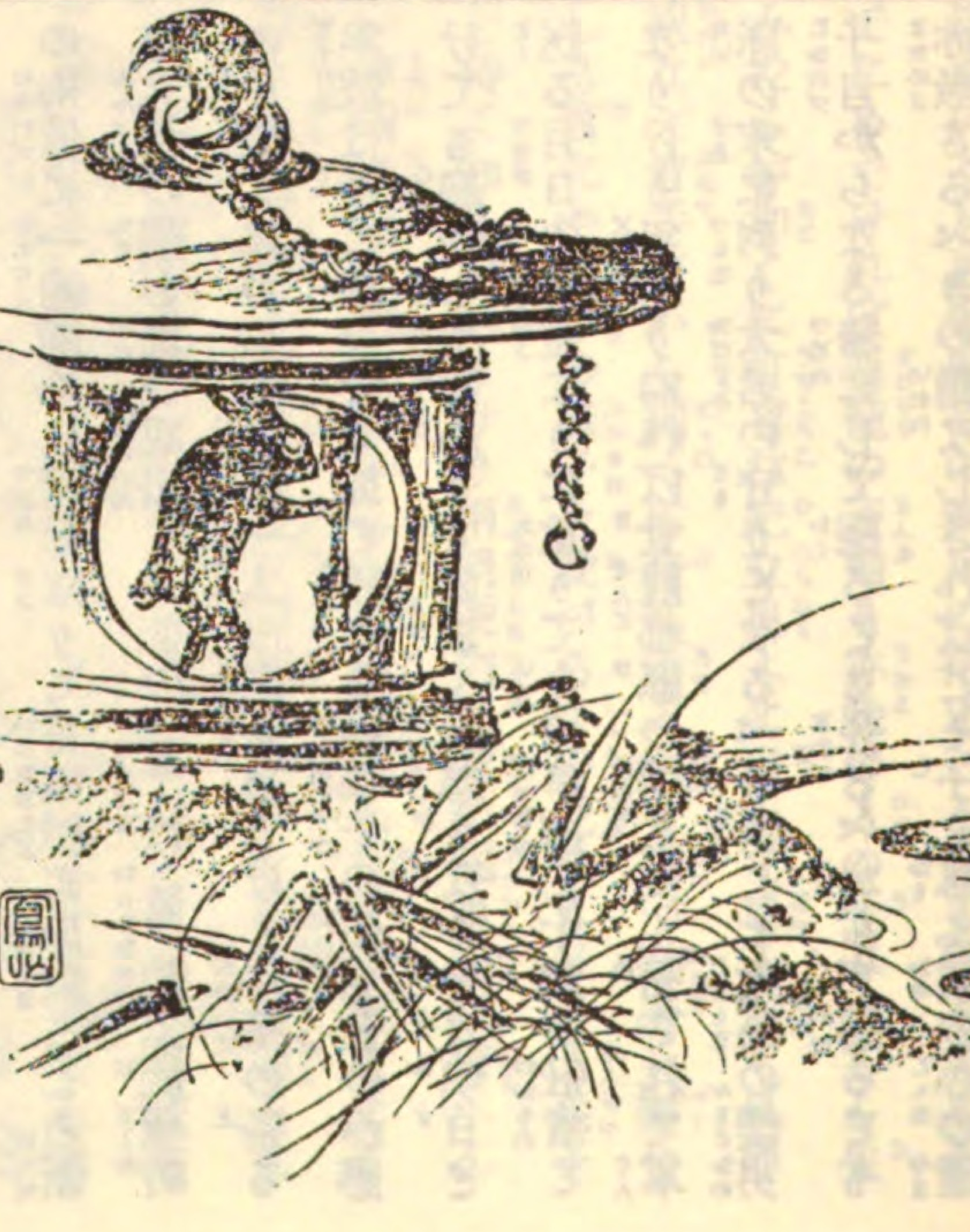
子狸はやつと氣息をついて

兎の子は笑ひながら

兎の子『あんまり、がつ〳〵するからさ。

といつてる中に子狸は禮もいはず、のさ〳〵と行き掛けます。兎の子は、呼び留めて、

兎の子『お前は本當に馬鹿だな、物を貰つて默つて行



くつてい事があるもんか。ソリヤそうと己等此の十五日にお月樣のお宮へ上るよ。お前ソン時見にお出

で。

此の日は、これで別れました。

二日も過ぎ、三日も暮れ、七草も經つて、今日は十五日です。兎の家では、今夜上天といふので、朝から仕度をして居ます。狸の家では、結句邪魔ものを追つ拂ふことですから、隣保の出立を何とも思ひません。只子狸は、上天といふものがドンなにか面白いかと思つて日の晩れるのを待つて居ます。

軈て日も落ち、烟が棚引きますと、東の方に當つて、月が差し昇りました。兎の一家ば、イザ上天といふので、器倆一杯の裝束で、穴を出でゝ、月を眺めて居ましたが、軈てよき程とやなりけん、一聲萬歲を唱へて、月の宮に昇りました。

之れを見て居た子狸は、餘りの事に腰を拔しました。

軒葱

三鷹子

梓弓春は來にけり音信る一陣の東風に俗腸を清め早咲の梅僅に一輪漸くに蕾を破りて香氣誠に床敷ところ新に文机の邉を拂ひ説出す一條の譚は紫匂ふ武藏野の片側なにがしの村に一人の老女ありけり片糸の寄る年波は苦にもせで太郎と呼べる唯獨子の生立をのみ懸けても願ひし甲斐ありていさゝか恙もなく今日明日と送る月日の彌重なりに重りて今は早滿二十歲の壯者となりけり年來りぬれば貴賤都鄙の別もなく召されて軍隊の末に列り大君の守りとなるべき事こそ敷島の倭男子自からなる務にして隱るとも免るべからず遁るとも亦赦さるべきの謂なしさればこそ子を思ふ親の心の遣瀬なく光彩の門戸に生ずる時ならなくに押なへて男を生むを重ぜず女を生むをのみ却て重ずる者もありとかやまして况んや賴みし人に離れてより敢果なき女の手

一つにてこゝらの年まで生ほし立て憂も是に忘れ悲も亦是に慰み行末々の荒増事繰返し又繰返し常住坐臥に忘るゝことなき太郎のやがて召に應ずべき如何につらきかな悲しきかなあはれ其閫に於て免がれしめ給へよと非禮受け給ふべくもあらずと知らぬ愚かさは千早振神に祈り佛に願きし一心の凝りて是を動かせしや現役僅かに免がれて補充隊に編入されけり母の喜びは譬ふるに物なく三千歳の齢を伸べしが如きにつけても亦今更に最痛く老の心の傷むるは太郎に合せて我身の行末を托すべき嫁の事なり知れる人逢ふ人毎に頼み聞えたまく\に探し得たれば或は五行に防げられ又は星術に支へられて纒まらず漸くにして程遠からぬ或村に年久しき樵夫何某の長女今年十八の乙女小夜といへるを迎へんことの約整ひいよく\黄道吉日を撰び芽出度は草の家も變ることとなき三獻の盃に千代八千代までの契を結び固めたりけり双心合すれば破障垢衾も翠帳紅閨の樂に等しく夫婦いと睦しく相和して間もなく岩田帶の祝に双方の親を喜ばしめ日數事も無く滿足して其年の暮安らかに分娩せしは玉を欺く男子なりけり老母はいふも更太郎手の舞足の措どころをも覺えざるまでにめでければ巣籠の産婦も亦餘の人の生みざると生みたるが如くに打喜び肥立思ふに増して早く何くれの祝など皆手づから調へて身に餘る許り萬づ華奢を盡せしも實にや若草の緑子を愛づる心の色なりけり人生子を持て知るべかりけり兩親愛撫慈育の鴻恩山に譬へんか須彌猶低く海に譬へんか蒼溟猶淺し匐へば起てよと導き笑へば言へど敎ふ宛然雨露の草木を潤すが如く又は日光の大地を照らすが如く見えざるに及び聞えざるに達し樹頭に啼明す夜の鶴の悲み長しなへに休する時なく卵を抱いて野火に燒かるゝ雉子の思ひ日と共に新なるにつけても思ひ出づるは手一つにてこゝらの年まで育て給ひし母の苦勞今の我身の心遣ひに優るとも劣

る事のあるべからずそが千萬分の一をだも報ひまつりやがて風木の嘆なからんことこそ御身と我身の當さになすべき務なり此事假にも忘るべからず夢な心を弛めぞと小夜の寢覺にも打語らひ夫婦心を一つにしてかぞいろの母に仕ふる事いとまめやかにありければ實に育甲斐のありけりと二人を褒め又母を羨やみ語り次き言ひ傳へ玉鉾の道行く人も老女の幸を己がじゝとり〴〵に風潮するに至りたりける去る程に新玉の年立還へり迎へれる明治二十七年といふは如何なる年にやありけん春の初の程よりして世の中唯何となく騷がしくやがて朝鮮國の事により不遜暴慢の清國との交誼端なくも破れ國志ろしめす聖天子は七月某日を以て戰端を開くべきの止むなき由を勅し給ひたりければ左なきだに義に勇む我邦人の習とて或は金を募りて兵站萬分の用に供し或は物を送りて兵士の勞を犒ふなど至らぬ隈もなき歡呼萬歲の聲裡忠實なる臣民の奉送の裡に大纛を廣島に進め給ひたり凜然たる士氣は益々軒昂して堂々たる兵士は　天皇親征のもとに其威を海陸に奮ひ面積の大を以てすれば二十倍にも及ぶべき敵國を物の數ともせず乃公手裡との思ひをなせる心の强さ畏しさ如何なる天魔鬼神なりとも何條面を向くべけんやされば百萬の兵立ところに集まる徵兵令の細かなるには豫備後備補充或は歸休などの籍にあるもの茅屋塲裡一家團欒の樂を殺がれ安けき枕の夢を破られ鋤鍬を捨て又は算盤天秤を投げ入隊するもの日に續ぎ夜に續ぎ其數計るべくもなし太郎も亦入隊すべしと一片の召集令狀は正に是青天の霹靂一聲耳を蔽はん由もなく母の悲み妻の嘆き頼みなき神佛までも恨めしく洋々たる一家和合の快樂は忽ちに消え失せていづれも顏色土の如く額を集めての歎息も今更何の詮もなしと漸くに思ひ明らめんとすれば頑是なき幼子の笑顏に我知らずも後髮の曳され妻の決心は又母の愚痴に破られて轉た果しもなか

りけり沅湘日夜東に向つて流れ去るが如く愁人の爲に暫くも止まることなき日影は早今日と暮れ明日と去りいよ〳〵入隊の間際となりけり心ならずも出立の祝ひに一家近隣集ひ來し中に何某の翁とて常に物の本を嗜める人ありおほけなくも名譽ある軍籍に列なり國の爲又君の爲に盡さんこと世の今の世にてあらざりせば何條我等土民の子の叶ふべき事あるべきかや加之ならず此度の戰爭こそ實に日本開闢以來振古未曾有の大快事



男たるものは願ふても行かまく欲しき時なるべし翁も今十年若かりせばたとへ人夫の端となりとも必らず渡るべきものをと樣々と辭を盡し最懇ろに母を慰め太郎を諭し妻にも呉々言ひ含めければ三人を初め並居たる人々も實にと心に會得して果ては思ひしよりもいと賑はひ芽出度其席を濟まし其夜は已かむき〳〵暇を告げて歸り行きけり明くればいよ〳〵其當日なり太郎は老若の人々に送られ呱々の聲を揚げてより未だ曾て一日

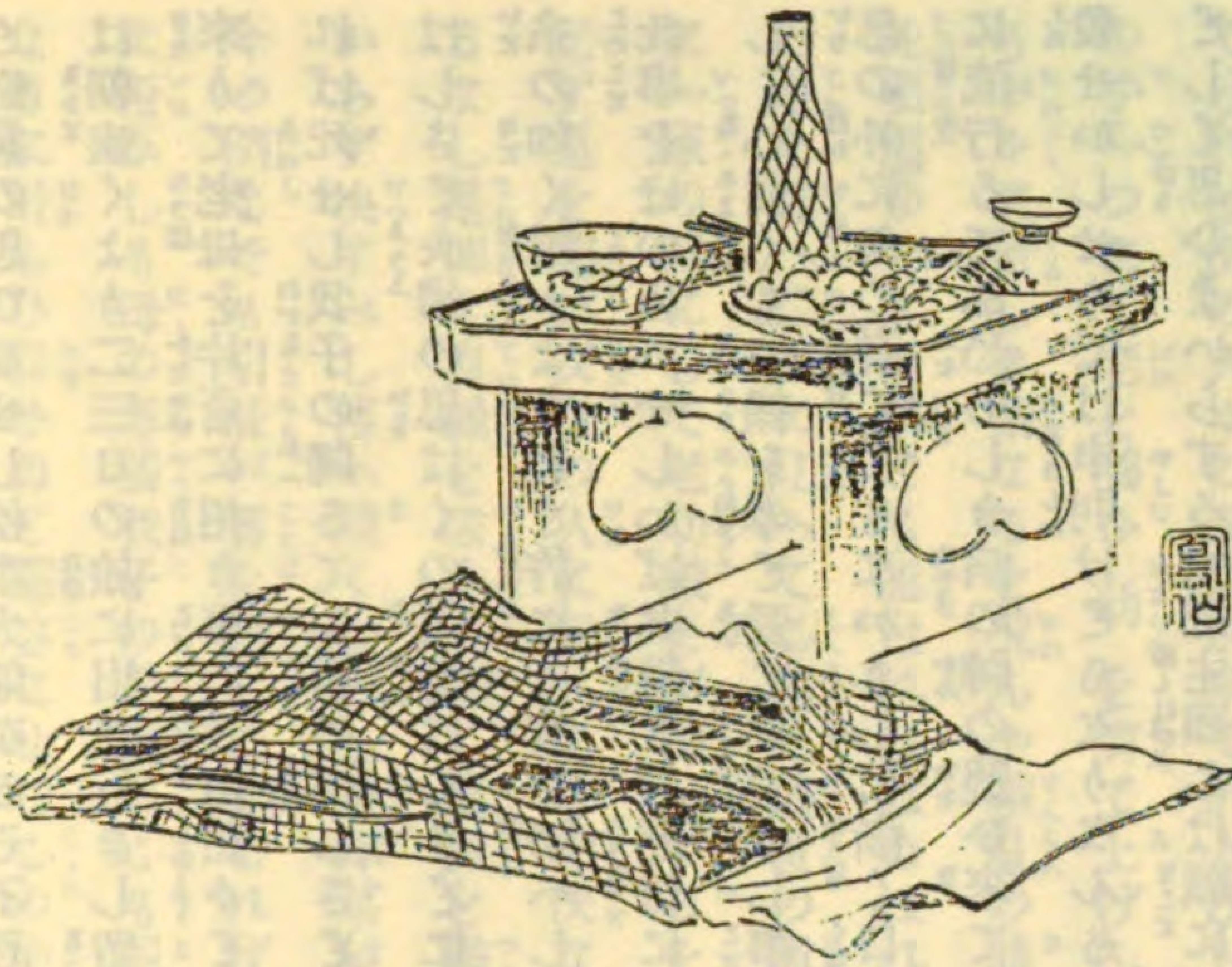
ぬ仇に去りし事もなき故郷を今や餘所になし見返へり勝ちに老母妻子に引別れやかてとの一言を跡に殘し姿は忽ちに見えずなりけり其より後は母も妻も其方の空のみ戀しくして今日は我子如何にやあらん明日は我妻如何におはさんと共に心を傷めけり日數追々に重なりて太郎はそが一隊の人々と共にいよ／＼廣島に進み彼地にて暫く逗留なしたる後戰地へ渡るべきに定まりしと言ひ送り來たりしより朝な夕な雨につけ風につけ西の空をのみ眺めて暮しける内に軍は日毎に劇しくなり行きしも唯松崎の大尉白神某等を初め二三の人の戰死の外は悲しき音信とてはなく今日も明日も明後日も續きに續いて報し來る連戰連勝の快聞は大本營より夫々に傳へられ都大路の戶々は言ふも愚如何なる津々浦々藻汐燒く海女の苫家薪採る賤山かつの住家まで茜さす旭の御旗たてゝ祝き笹の葉の酒汲かはしてたゝゆるなと出立ちし軍人の三族せめての心を安んすべきの便なり太郎が母も妻も此れによりて其恙なき事を知りて大ひに喜び偏に葛の裏葉歸り來ん日をのみ樂しみ待ちて暮しける其衣更の望の頃小さき包に添えて戰場より來りし一封の書簡取る手も遲くひた急ぎに急きて例の翁許携へ行き願ふは是れ讀んで給はれと差出す宛名は松本太郎殿遺族御中分隊長何某よりとは心得ぬ其書振り譯こそあらめと封押切りて一行二行と讀み以て行くにつれて次第に變はる翁が顏色唯ならぬ有樣に母は如何にそや／＼と尋ぬれども翁は未だ何とも答へず漸くにして我知らず落つる淚を振り拂ひ鼻うちかみて詰り出づる樣去ぬるそれの日我軍の一隊斥候として如法暗夜降したく雨を犯して某の森にまで進みしに敵兵凡そ二三百人と衝突なしけり元より死を決したる倭男子進んで死するを知りて退ぞて生くるを知らず各々何程の事かあらんと屈せず撓まず彼處に切りかけ此處に追つめ彼我入亂れ短兵急に相接し虎嘯獅吼の術を盡して

戰ひしも如何せん衆寡敵せず何れも數ケ處の深手に無念ながらも名譽の死を遂げ辛ふじて逃れ歸り此事備さに語りしものは僅かに一人明くるをも待たずせめては其死骸をも拾はんと我身自ら手下の一隊を指揮して彼處に行きしも敵は其影をも止めず殘れるは算を亂して横はる死骸許なり卑怯なる敵兵に奪ひ去られて何れも其首を止めざればいづれをいづれとも知るべからず唯其懷にあるもの或は其あたりに落散りありし手帳其他の物によりて覺束なく彼此を見別けしも全くは定かならず遺憾元より言ふを待たず遺族の悲も嘸々と思ふも胸つまる心地なりされど其復讐は遠からず我等が手にてなすべければ添へて送りまいらする遺物にせめての思ひを晴らし給へよとの逐一讀終りて傍なる小包を開き取り出せば實に一冊の手帳と一ひらの手巾にして碧血數點累々として恨の痕を留めたりけり見るに悲しく聞くに憂く前後を忘れて身も溶けん許泣き叫ぶ母を慰めん辭もなく翁も共に遣瀬なく悲しきを漸々に思ひ返へし樣々と物の理を盡して諭したりけり慰めれて打悉れ愁然と起て宛然屠所の羊の足弱々と歸り行きけり家には待居たりける妻の早くも戶口に立ち出で母樣如何に候ひしやと問ふにつらさの淚と共にありし樣子を最詳かに語りつゝ片身の品々差出だし見せければ見もやらず聞きも終らずよゝと叫ぶ悲鳴の聲に打つれて譯知らぬ幼子もひた泣きに泣き止まぬこそ流石恩愛の緣情の糸の通へるが故と思ひやられて憐なる事の極みにぞありける斯くてあるべきにあらざれば諸人の手に助けられて遺物を柩に納めて葬送の儀式を執り行ひたりけり旗造花各々其美を盡し送りの人々數を極めて集まり來り其式の最盛なるにつけても溢るゝは二人の玉の涙なりけり追善の看經供養一の怠る節もなく朝食に出でし鶴の子の松に歸らぬ淋しさを歎く白髮の老母香を焚いて唱名すれば番離れし雪中片鶴の思をかこ

つ貞操の妻は阿閼を手向けて後生善所の祈る有様憐にも亦殊勝なりけり限りあれば七々の逮夜も今は濟み果てければ例の人々の又集ひ來て計りけらくかよわき女の手一つにて老を養ひ幼を育て上げん事唯の時さへも中々に苦しき業なるを況んや戰亂の時節諸事費多き此頃堪ゆべきの事とも思はれねばあはれよき人を擇んで是を迎へ二夫に見へて心安く渡世の道を求めん事誠に一家の爲にして老幼餓えず凍へず日を送らば死者も必ず是を喜び又世の人に對しても面伏なる節一つもあるなし是即ち貞操を破りて却て貞操を盡す理り疑ふべからず決すべし傳へ聞くむかし河津某が妻はなどゝ古今の例までも引並べ言を盡して勸むれば初はひたすらに否みしも母の孝養我子の愛育に心も弱はりさらば萬よきに計らひ給ひねど應答なせし心の中そも／＼如何にありつらんやがて日ならずして或男を迎へ夫を重ぬる二度の伉儷事調ひて家内何となく今更に賑はしき心地なりけり去る程に今年も全く軍に暮れ明る年の夏の初め初度の乞和使すげなく逐歸されしにも懲りずして次いで來りし二度の使臣も亦其功をなさず古稀矍鑠の老宰相年來嘗て異境を踏まざりし身を起して東海の波を渡り日東下の關路に來り茲に兩國の全權大臣相逢ふて平和恢復の議を講ず世界萬國の耳目盡く春風樓邊に集まりけると思はざる砲發一聲に一度は結果いと危く見えしも何事なく治まりて其後數日約全く成りて戰鬪一朝に終りを告げ諸事是れに關すること濟でいよ／＼捕虜の交換とはなりけり百數十の清兵捕はれて異境に故山の夢みしもの如露の一命恙なく今日本國にかへる喜び其色自から面に表はれ嬉々たるはさる事ながら武を以て立つ者の爲に取らざるところ日本兵士には斯る女々敷もののあるべうも覺えずと萬口一音に相語りける門前を走る新紙の號外日兵の彼れに捕はれ其虐待の裡に呻吟せしもの僅かに二名此度歸り來るべしと傳ふ其

一名こそ孤墳土漸くに其色を變へて草將さに茂らんとせる一基卒塔婆の主幽明境を異にして又逢ふべからずと郷黨の思ひなせし松本太郎なるぞ不思儀なりける婿は朝疾くより二三日の旅に出て行きし留守に例の翁の來りて老母を片蔭に招き事の故由然々と細しく語りければ死せし我子の歸るてふ事の嬉しさと斯る風潮の疑はしさと夫婦の思はくの氣遣はしさとに思ひは亂れて糸の如く唯とよきにと許にて翁を歸へしさて妻にも亦此事をほのめかせしかば其驚きは老母にも增して甚だしく心弱くも貞操を孝と愛とに破りし事の口惜しく吐息の外に何の辭とてもなかりしに漸く口を開き今上方に流行るてふ恐ろしき病の神の襲ひ來て苦しき我身を殺せかしせめては申別けともなりなんものをされどいとしと思ひまいらする太郎主願ふは誠に歸り來まして今までの如く睦しく母上に仕へまつり度きは山々なりさらんにはいふもいと〳〵恐ろしけれど其病の神の襲ひ來て今の主を殺せかしとかこつは信か僞か老母は頓て其語をつぎ御身左程に思はんには叶はぬ事のなきにもあらず斑猫の毒を酒に混じて進むれば處を去らで死すとぞ聞けり翌日にもあれ歸り來れば其手立を廻らさん事如何にぞやと身の毛もよだつ恐ろしき毒殺の巧みも實にや恩愛の一種の傾きといふべきかさらば母上然なさんと毒酒を以て待つとも知らで其三日目の夕つ方急々として歸り來れり母は折しも他に出でゝあらず殘るは妻と幼子のみ思ひ定めし胸も何となく慄きて出迎ふに聲もいたく震ひたりやがて夕飯の膳を進め杯に溢るゝ許り酌きけるは命を取るべき毒とも知らで笑しげに打眺めたるまゝ未だ飲もやらず下に置き傍なる風呂敷の包押開き土產の印に參らすと取出したるは色よき女の帶なりけり仇とも知らで斯くまでも優しき心の嬉しさに妻は忽ち我身を悔みける此時早く彼時遲く杯取り上げやをら飲まんとする手に確かとすがりて

奪ひ取り唯一息に飲み乾しければ面色見る／＼變り行き七顛八倒血を吐いて其まゝ息は絶たりけり譯知らざ



れば驚き慌て泣く子を片手にすかしつゝ狼狽極めし折しも首尾は如何にやと歸り來しは母なりけり案に相違の此有樣に肝をつぶし唯呆れに呆れたるまゝ馳け出さんとせるを引留め子細あるべし語り給へよと問へども更に知らずといふ騷がしき物音に馳せつけし近隣の人々兎も角もとて此由斯くと知らせしかば醫師は來りて樣子を見ては容易ならざる事なりとて警察署に急報して其立合を乞ひ診斷の趣き殘りの酒と共に差出しければ恐るべき秘密全く玆に破れ果て老母も婿も事實取調の爲直ちに拘引の身となり珍事はとり／＼に傳へられて四方八方に擴まり近鄕近在老若男女茶飲話の種となりけり其後度々の調べに老母は遂に隱し得ずありし次第一々落もなく自白せしかば頓て公明嚴正なる法に照されて相當の所分を受け婿は其まゝ放免されしも其場より何國へ行きけん踪跡全く定かならずされば例の翁の手に預けられたる幼子は天地間殆んど全く所親を失ひ餘所の見る目の泪の種なり日數經て風聞ありし我邦の捕虜いよ／＼宇品に達せりと傳へられし七日目に果して太郎は歸り來れり凡そ歸鄕の軍人苟くも一度敵地を踏みし者は種々手を盡して歡迎されしも是はそが例にもよらずいと面目なげ

にすご〳〵と歸り來りて一々を見るにつけ聞くにつけ驚きの種淚の種與なき今の有樣も僅かに幼子の愛に引され今日明日と唯其日〳〵を送りしが思へば思ふにまして不甲斐なき我身厭ふべき世の成行き無念の熱き淚を呑んで惡むべき敵兵の辱を忍びしも千萬一にも二度慕はしき地に歸り一家和合を樂まんぞとの爲なりしに思ひきや母はあれども逢ふ事難く妻は又言ふに堪えざる生を終り剩さへ鄕黨竹馬の友にさへ捕虜々々と指をさゝれ八面盡く暗憺として一片の光明身邊を照らすものなく悲雨蕭々たるの夕異境鐵窓の夢にも通ひし美はしの故鄕は今や鬼住む里となりけり殘し置く寄邊なき此幼子の事母の事此上にも宜しく賴み參らすると誠に一字一淚長々しき一封の遺書例の翁へ宛名して斯くとも知らず哀れやな母に側寐の夢もや見けんすや〳〵と眠れる幼子の枕に殘し遼東半島萬馬駐驄の巷に捨て得ざりける男子二十六年の一命久々に見し我茅屋の梁に釣し果てけり

嫌ひ花

生花に嫌ふ花は一花一葉四花四葉六花六葉は申すまでもなくむくげ、つゝじ、櫻、茶の花、萩、荻、しんちやうげ、ざくろ、百花、鳳仙花、女郎花、桔梗、かるかや、しぎみ、鬼あざみ、山うつぎ、刺ある類

談叢

南極地方探撿記（下）

楓葉譯述

一月十八日ポスセスション島を見、小舟にてノルス島に上陸す。此島は夥しきペンギイン島の住家にて、我々人間の侵入し來れるを憎れるにや、我々が相互に話す言葉も聞き分かぬまで喧聲に鳴き立てながら、四方

より我々を襲ひぬ。此處は五十四年前サア、ゼームス、ロッスの初めて上陸して英國旗を樹てたる所なり。ペングィン鳥は多く雛を有し、爲めに鼠色の賊鷗に襲はるゝことあり。記者も偶二羽の賊鷗が此島に舞ひ下りて、ペングィン鳥の家族を襲ふを見物しけるに、其一羽は親鳥に突ひてかゝりて内顧の隙なからしめ、其隙に乘じて一羽は優々と雛の肉を啄み喰へり。此賊鳥は實に大膽極まるものにて、記者の如きも此鳥の爲めに襲はれ、棒打ちふつて防禦したることありつる程なり。島の全面には鳥糞深く積めり。是れ濠洲の一金庫となるべきものなり。偖尤も奇妙なるは此のペングィン鳥の擧動にて、渚より島の中央までの幹線は云ふに及ばず、其他右に左に幾條ともなく、ペングィン鳥は嘴と足にて丁寧に大石小石を取りのけて奇麗なる道路を作り、其上に雪降りてはまた之を踏み固め、誠に坦々たる一等道路を敷きなせるが上に、此道路を渚の方より或は渚の方へ往來するに、來る者は右去る者は左と秩序整然相わかれて歩むこと、不思議なる次第なり。右の如く此鳥は誠に同胞相親むで、また一夫一婦の實を行ひ居れり。道徳は却て南極の鳥群に見出さるゝぞ、奇妙なる。

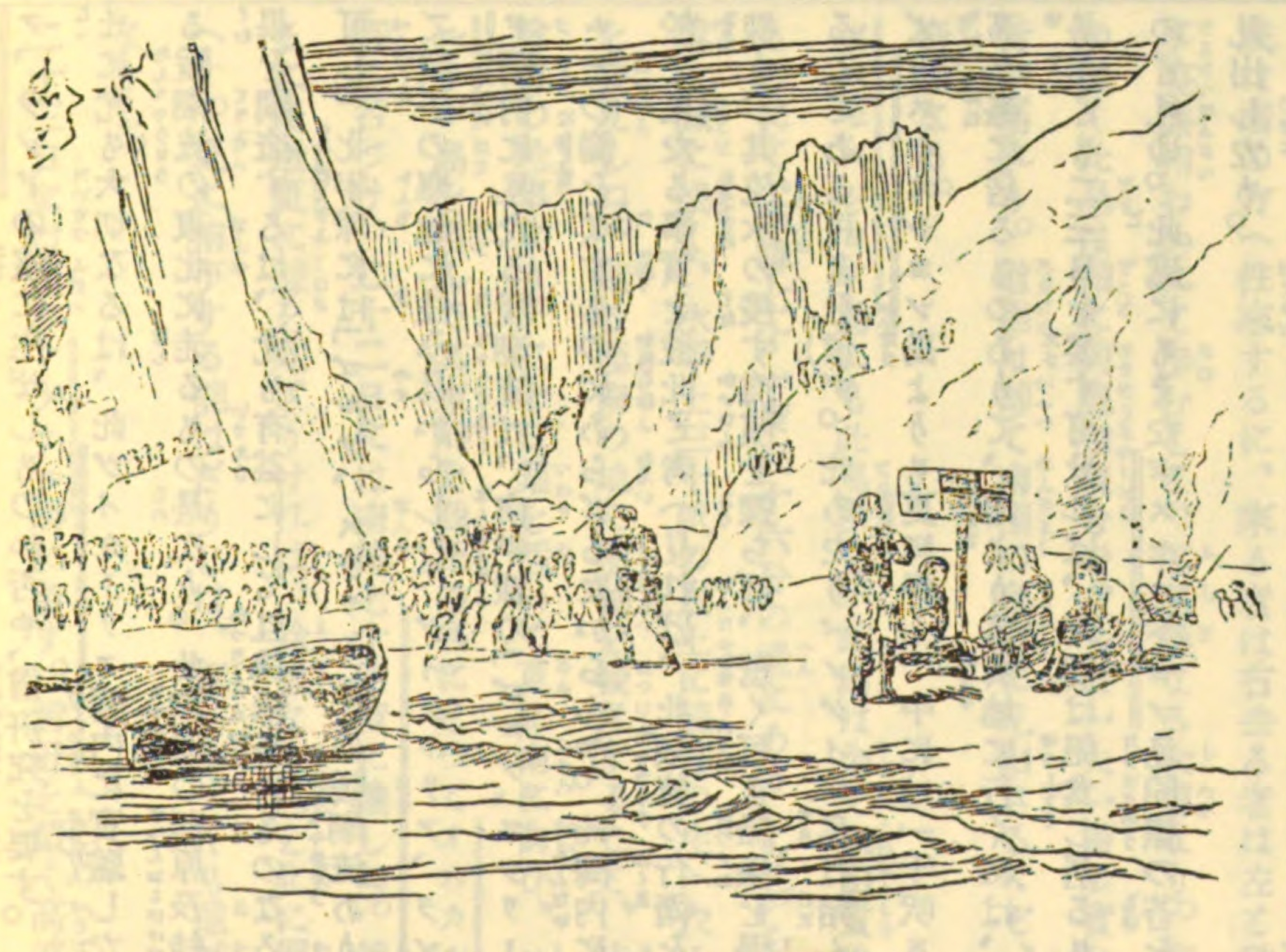
ポスセスション島にも此鳥多し。此島は全く火山質のものにて、南緯七十一度五十六分の邊にありしながら、雪も誠に淺く、水平上三十呎の岩上に蘚苔の生へたるを發見しぬ。斯る極南の地に植物を發見すること、未曾有の珍事なり。二十日錨を拔いて更に南に向ひ、コルマン島を望んで其東岬を我王の名にとつてオスカル岬と名づけ、二十二日には南緯七十四度に達しぬ。然るに此邊更に鯨を見ざりければ、餘儀なく船を北に廻へす。更に南下する能はざりしは、返へす〲も遺憾なりし。

二十三日には再びアデール岬に着す。雪冠を戴く高峰

は巍々皎々として午日に輝やき、大なる氷塊は宛ながら仙宮蓬萊山の如く流れ漂ひ、此あたりの景色誠に無双なり。此夜アデール岬に上陸す。ヴィクトリア、ランドの本土に上陸したる人間は、天地あつてより我々を以て初となすべし。此無人未知の地に、小舟近づくに從つて、我々皆一同に云ふ可からざる感情の湧き起るを覺へぬ。此あたり氷片數塊水に漂ひ、また小舟の側より下し見るに普通の海月を水中に認む。此海月を捕へんとてか、たゞしはまた此無人未知の地に足を着くるの第一番たらんと欲せしによるか、櫂をとめよの號令下ると齊しく、記者は身を躍らして淺瀬に飛び込みぬ。斯くて大きなる箱に記者は挪威の國旗を掲きて、棹に括りつけ、之を上陸の地にさしたり。餘人は上陸してペングイン鳥と戯れ、記者は獨り此土地の地質其他をしらべ、諸物件の標本を蒐集せんとて、ぶらつき行きぬ。渚には海草を見たり。併し此はヴィクトリア、ランドの濱に生ぜしものか否や、猶研究を要す。

此に尤も大切なるは、此ヴィクトリア灣内に實驗したる暖潮流の東北に走るもの是なり。此潮流の起原及結果を調査するは、尤も有益にして且興味多きものなる可し。北半球には「ゴルフ、スツリーム」の暖潮流ありて幾多の寒地に住み易からしむ。ヴィクトリア、ランド灣内に見たる暖潮流は、南半球の「ゴルフ、スツリーム」の働をなすものにあらざるなからんや。此灣內に於て見たる事實を彼此と考へ見れば、此潮流の行衛を探り、其流水の浸す海濱を探らば、驚く可き結果を得ることある可きを信ず。此あたりペングイン鳥は殆んどポスセスシヨン島よりも更に多く、中には一千呎も高き峯に居るものありて、渚より其高地に行くには、是非とも二三日を要す可ければ、此間は絶食し居るものと見ゆ。此處にもまたポスセスシヨン島同樣の苔を見出したり。

將來學術上の遠征を南極に向くることあらば、此アデール岬こそ冬の間も滯在して差支なき場所なる可し。ペングイン島の古巢の存在すると云ひ、幾年も經たらんと覺ゆる海豹の死躰の處々に點在することゝ云ひ、岩上の植物と云ひ、兎に角此處こそ南極圈内の寒氣も其力をやゝ寛ふせる所なるに相違なければ、此處を中心として探撿せば尤も宜しかる可し。記者自らも一隊の探撿隊の首領としてコルマン島の邊にて本土に上陸し、南緯七十五度五分東經百五十度の邊にある可しと云ふ磁石的南極に向はんことを希望し居れり。何にせよ、四百萬方哩にも及ぶと云ふ前人未知の南極地方大陸のことなれば、南半球に於て未だ曾て見る能はざりし寶物の此處に存在し居らんこと、殆んど必然の數にて、且此ヴィクトリア大陸なるものは或は氷雪の鎖によりて一に繫がれし群島に過ぎざることある可しとの論も尤ならんか、地形、水色、南冰洋裏氷山の運



動、其他種々の事實より考へ見るに、此は群島にあらで大陸なる可しとの說眞に近きを覺ふ。四百萬方哩と云へば、濠洲よりも大なり。且ヴィクトリア、ランドの火山鏈は海拔一萬五千呎の高きに達し、南亞米利加側の南極圈內にはブリッヂマンの活火山あり、直徑五哩以上の噴口を有するデセプション島の大火山あり。其他千八百九十三年セームル島にては「イオシーン」時代の沈滓岩中に木葉石の存在するを發見し、またラウリー島の邊にて灰石を發見したるなど、南極を繞る大陸は即ち大陸にて、群島にあらぬを知るに足れり。

斯くて我々は再び本船に返へり、二十六日再び北歸の途に上り、南緯六十九度五十二分の處にて再び氷野に乘り入りぬ。次日小鰭鯨を射とめたり。肉の味甚だ美なり。此鯨を補るに、距離遠く、氷塊繁く、小舟を遣るに困難なりければ、余は銛を提げ、氷塊より氷塊へと飛び、頓て鯨の高く頭を水上にもたげて射られし疵の爲め悶へ苦み居る場所に近きぬ。然るに最後の氷片に飛び移らんとして、思はず薄き氷雪の間に落ち込み、危く沈まんとせしを、つゞき來りし一人やう〳〵にして引きあげ、難なく鯨を刺とめたり。此小鯨はながなが我々を苦め、或時は殆んど我小舟を引沈めんとしたり。二月一日、氷野にあること僅か六日にして、また開けし海に出づ。此より抹香鯨を獵し、また颶風に苦められ、油を流して波を防ぎ、三月十二日無事に濠洲メルボルン港に歸着す。さきに此港を出でしより、こゝに到りて五ヶ月半を過ぎぬ。

（完）

譯者云、最近歐洲電報によれば、北極探撿家ナンセン氏はいよ〳〵其目的を遂し、首尾よく北極に達して歸れりと云ふ。左れば多年多くの勇敢なる人物が犧牲にしたる地軸の北端は、終に人間の版圖に入りたるなり。殘りは南極のみなるが、近々南極探撿の一隊英國より發する由にて、今其準備中なりと云ふ。

貧乏少年　K、T生

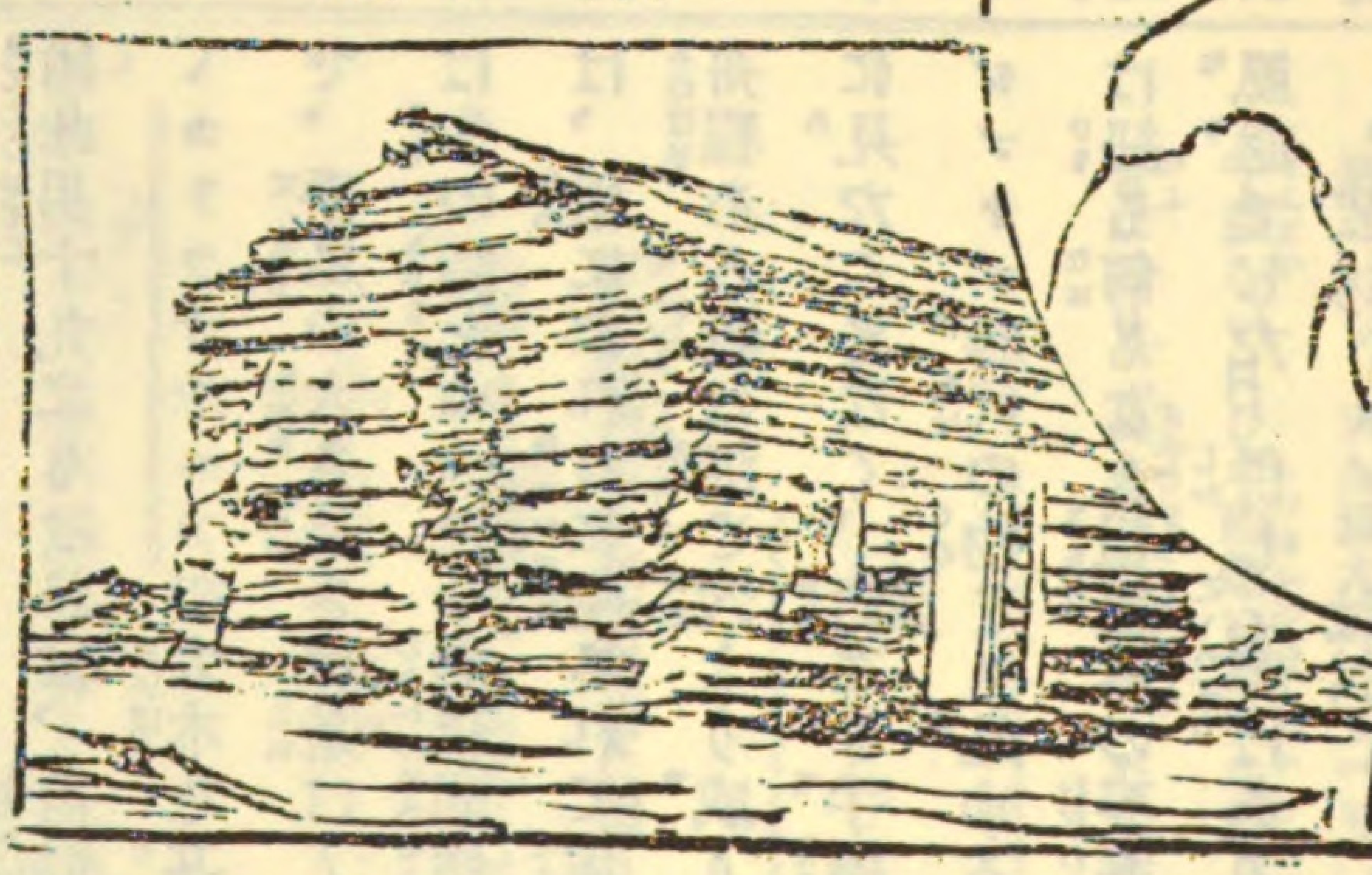
金剛石は何處に埋れてあるやら知れず、大人物は何樣な田舍から湧き出でるも知らぬもの、して見れば子供の育て方ほど注意す可きものはありますまい。

九十年ばかり前でした、亞米利加合衆國の片田舍、ケンタッキ州の其また田舍の、部屋一つ戶一つ窓一つと云ふ粗末千萬な小屋の中に初聲をあげた男の兒がありました。時に父は居ず、母は食物がなくて困つたと云ふ程の貧乏暮らしで、此處へ生れて來た兒は五六年が間人間のきれか犬猫か分からぬ位憐れ至極な有樣で、間もなく母は死に家は移り氣丈な繼母が來て、此男兒もやう〳〵人心地する樣になつたといへば、其生ひ立の樣子も思はれます。偖右の男兒は六つ七つからして早や百姓仕事の手傳ひやら、また人に傭はれては牛をひき、溝を掘り、子守までするといふ鹽梅で、中々「お母さん、紙鳶買つて呉れなひと僕は學校にや行かぬからいゝ」などゝだゝを捏る隙はなく、頓て村の小店の下はたらきに雇はれた時は、此上もなき立身出世をしたとて喜んだ位でした。ですから、學問など云ふ事は以ての外、唯一寸讀本の一冊も習ひ習字の五六遍もなし加減乘除の初歩を敎はつた位で、先づ其境遇から云ふと、精々立身した處が畑の五六反ももつて牛二三疋飼ふ百姓になるか、店の物悉皆拂つても百弗には上らぬ小店の主人になるか、其位なものでせう。が、不思議なは人間の志と云ふもので、誰か何時何處で如何して吹き込むだやら、但しは天道樣が人知れず夢の中に其肝膽をかき起し玉ふたやら、此男兒學問に志し、書籍を有て居る者さへあれば、二里も三里も行つて借り受け、貧乏暇なき間を竊んで、イソップ物語や、ロビンソン漂流記や、天路歷程や、ワシントン傳や、合衆國小史や、さては或代言人の持て居たインヂアナ

州の調査書など云ふ砂噛む樣な書類まで、字さへあれば讀ました。一日の骨折仕事終つて、ぼろ着て汗たらしながら、或は部屋の隅に蟄居し、或は木の蔭垣の根などに足なげ出して玉蜀黍のパン噛りながら、餘念なく讀書に耽る少年を、家族の者も近所の者も不思議な子ぢやと怪で居ました。

偖右の男兒は段々物識りになつて、時々は御前達はお日樣が東から出て西に入ると思つて居るが眞實は此世界がお日樣のぐるりを廻るのだよ、など〻云つて聞かして、村の娘子供の眼をまるくさしたこともありました。夫れから讀んでばかり居ず書いても見たくなり、文章の獨稽古を始めましたが、紙が少ないによつて、草稿などは木ぎれ板ぎれに木炭の屑もてかき、成丈紙の幅を取らぬ樣、勉めて簡短に〳〵文を綴つたと云ふとです。





或時、悪小僧共大勢スッポンを捉まへて背に火をのせるのを見て、慨然として動物に殘刻なる可からざるの論を書き、また或時燒酎に醉つた男の風態を見て、禁酒論を書きました。また詩の樣なものまで作つて可厭な奴原を諷刺し、一郡の政治問題までも筆にかける樣になつて、天晴村中の驚異者でした。偖又演説の稽古まで獨りで始めて、日傭に行つて居ながら、晝の休などには、畑の眞中の木

の株に立ちあがつて、仲間の者共呼あつめて、面白可笑き演説や時々は眞面目な演説さして聞かせ、雇主の機嫌を傷つた事もありました。併し仕事にかけては、出精と云ひ、手際と云ひ、近所近邊に此少年ほど役に立つ男はなく、十七の頃から身の丈六呎四吋と云ふ大身材で、腕力の強いことは何處の相撲にも負けた事なく、重ひ物など抱ゆるに三人分の仕事をなし、此男が木を切る時は、遠方から聞ひて居れば確かに三挺の斧の音がする位。それに力はあつても慈悲深くて蟻一疋殺したことなく、物識つても高ぶらず、正直で出精し、時々面白ひ話をしたり、戯談を言つて笑はしたり、誠に好い男だと云つて、村中の老壯男女子供まで皆此男を愛しました。併し此男が不思議に讀書なんどを好み、おり〳〵ぼんやり考へ込み、また或時は平生滑稽を云つたりするに似合はず欝憂に沈むことあるのを見て、ドゥも其仔細を解しかねました。

偖此男十九にもなれば、身躰は米國の名物に數へらるゝカリフオルニアの大木も其方退けと云ふ大々的大男で、手足の大さ長さは是は〳〵とたまげるばかり、顔は牛の脂をぬつたる澁紙同然。はいたる鹿の皮の股引は、雨にぬれ日に曝されて處々に穴をなし、小人國の舟程ある靴は泥と穴より成り、ズボン釣りの一方は常に見たことなく、汚なき手織のシャツを着て、冬はワシントン時代の物とも見ゆる古色掬す可き古帽子、夏は紐も何もなき粗編みの麥藁帽、誠に見るかげもなき風態でした。併し志はある、腦力はある、腕力はある、健康はある、信用はある、自から腕をふるつて前途を開拓するの資格は、十分にもつて居ました。

で、父に從つてイリノイ州に移ると、頓て世間に出て獨立自活することになり、川舟の水手になつてミッシッピー河を下り、ニウオリアン市に往來しました。此の頃合衆國南部では奴隷買賣が誠に流行して、ニウオ

リアンなどは其中心とも云ふ可き地でした。偖、或時の事、右の男は朋輩と市中を漫歩する内、大勢の人寄かあるのを見て、何事かと近寄り見ると、奴隷糶賣の最中で、年の頃十四五の雑種の娘を中に立て、賣手は其娘を彼方此方と歩ませ、手をあげさせ、腕を捻りなんど色々して、サア／＼皆さん此通り極丈夫な代物だが大まけにまけて置きますサア／＼買つたり／＼、と大音に呼んで居る、彼男は此樣子をじッと眺めて居たが、俄かに顔色變り、朋輩を引立て、來ひよ、「彼樣なもの見る者があるか。今に見ろ、彼事をたゝく時が來たら、其れこそ根限りたゝきつけてやるわ」と。

吁是れぞ三十餘年の後、北米聯邦の大統領となつて奴隷賣買を國中より一掃し、國の父たる華聖頓に次で國の救主と呼ばれた近世の大人物アブラハム、リンコルンの一聲でありました。

人は名よりも行

女はみめの美しきが寵せられて、心の正しきを愛する人はまれに、物は形のめでたきを好みて意の面白きを取る人少し、或家の妻は美人の聞えありしかども妬む心深くして夫の放埒なるをいきどほりつゝ、常に爭論絶えざりしが、ある時、妬のあまり、夫の留守に縊れ死にたり、夫も、大酒のために吐血して身まかりぬ、妻の名を壽といひ、夫を福太郎とよべり、人は名よりも行にあり、松竹に千歳をいはひ、鶴龜に萬代を比したりとも、なほ、家を始むるは和合にあり、長生は養生にありと知るべし(柳澤淇園)

家政

家政欄擔當の記者微恙に罹り十分に力を此事に盡す能はず、次號より此遺憾なからんことを期す

小兒の齒

SK生

予が長女今歳四歳になりぬ、身體弱き方にはあらねど、

時々齒痛のために惱まさるゝことあり本人の苦痛は申すまでもなく、側に居る家族の輩も其苦痛の狀を見るすら共に苦痛の感あり、これ他なし、乳齒發生の頃より今日まで等閑に附し去りたるがため此禍を殘せり則ち齒の不養生なりしため、中央前齒二枚と側齒二枚合せて四枚の前齒次第に齲腐し齒は全く其形を失ひ齦内に僅に黃色の齒痕を認むるのみ、之がため折々齦腫れ上りて其都度惱さるゝこと一方ならず、併しこは予が家の少女のみならず斯の如き例最も多し

齒の齲蝕して齒形を沒するは、之によりて時々の苦痛を起さしめ其害肺胃に及ぼすのみならず、顏貌の美を欠き又言語明白ならず、左に乳齒の攝生を記せば

一小兒を能く運動せしむべし

一温暖に過ぎぬやうにすべし、夜間などは必らず寢衣に着替へさせ、シャツ、ヅボン下の如きものを脫せしむべし

一一週間に少くとも二度は浴湯せしむべし、甚しく浴湯を厭はゞ、隔日にても手拭を湯に浸し、能く絞りて小兒の身體を拭くべし

一滿一ヶ年ともならば斷然母乳を廢し、牛乳又は米粉、ぱん、そつぷの類を適當に調理し食はしむべし

一淸潔は齒の養生中第一の手段なり、小兒產出以來は常に軟きフランネル類を以て、常に小兒の口內を拭き淸め、五六ヶ月に及んでは每日二回も布片にて拭き淸むべし、乳齒全生小兒言を解し物を記憶するに至りては其母たるものは常に淸水にて口內を嗽ぎ食物の渣滓を洗ひ除くことを敎ゆべし

一それより食物を能く咀嚼することを敎ゆべし、決して倉卒に食物を嚥下することなく及ぶだけ嚙み碎かしむべし、而して胃の消化力の許す限は、可成咀嚼を要すべき硬固食物を用ゐ、多量の飲料若

くは柔軟食物を好むの慣習をつけしむる勿れ、かくする時は、一には齒牙の觸接面を磨擦し、齒上の醱酵をさまたげて齒病を未萠に防ぎ、一には又咀嚼勞働充血を増加し、顎骨を廣大に發育し、また堅固なる成齒を生ずる等の好果あるべし

一母親は愛情のあまり小兒を接吻し、又は己が口にて嚙み碎きたる食物を我兒の口に含み入るゝが如きは有りうちなるが、若し母親にして齲齒を有すれば、其病毒忽ち兒の齒牙に傳染するの恐あり、謹むべし、これは母親に限らず愛情深き父親にても

一一年に二回か三回は小兒の齒を齒科專門醫に撿せしめ置かば、病害を未然に防ぐべし

此外に小兒の齒につき尚ほ父母の心得たること多かるべし、併しながら以上を記して予も諸君と共に小兒の齒病なからんことを欲す

小兒の吐瀉病

東雲女

小兒の吐瀉病は食餌の濫用より起ること最も多し、又生母の乳を廢してより起ることもあり、而して該病は屢々卒然に襲ひ來りて猛勢を逞ふするものなり、此時は直に醫士を迎ふ可し醫士の來る迄の間は慈母自から手を下して相當の處置を施す可し、其症狀や幾回となく吐瀉し腸胃の消化力全く消滅して漸次に稀薄汚濁無臭の液を排泄し、朝には愛嬌溢るゝが如き愛兒も俄に羸弱蒼白の孩兒となり皮膚は枯燥し、顔面は老貌を呈し、眼は凹みて半は瞼を閉ぢ呼吸淺く不正となり、蒼白色の四肢は厥冷し心臟麻痺及び空氣缺乏を生じて遂に死に至る可し

他の疾病に在りては獨り食餌のみにて之を回復すると

難し、吐瀉病にありては屢ゝ醫藥に依らざるも食餌の攝生に依て平癒するとあるべし、即ち下痢を始めしものにて乳を廢する早きに過ぐる小兒には再び哺乳せしむ可し小兒乳房を吸ふを拒むときは、搾りて匙にて與ふ可し牛乳にて育せるものは當分之を廢す可し下痢の初期には大概此方法にて治す可し初期に於て大に渴を求む此時は煮沸せる湯を冷し與ふ可し

劇烈に發せしときは、發病後六時乃至十二時間は如何なる榮養をも禁ず可し、醫士未だ來らざるに既に生力沈衰するときは直に葡萄酒を小匕半匕宛半時間毎位に與ふ可し又身躰冷却し呼氣寒冷なるときは先づ温湯に暫時浴せしめ直に之を煖めたる毛布にて纒絡し又はフラネル及び酒精にて身躰を摩擦し其容躰に注意顧慮す可し、而して嘔吐下痢も全く止みたれば追々に小兒成規の食物に復せしむ可し

諸家の姉妹よ不幸にして愛兒に吐瀉病等發生せる時は決して忽にすべからず、自らも心掛け給ひて醫療の後れざる樣計ひ給へ

婢僕の取扱に就て

しばのや

一、幸福なる家政は四時共に花を絶たさるの花園にも等しからん

二、汝の婢僕を取扱ふには汝か其位置に在らは斯く取扱はれたしと希望するが如くにせよ

三、婢僕の心は多くは取扱ふ者の造り出す者にて命令者が不德なれば之を受くるの者も眞似して不德となるものなれは汝は良好に標本的生活を營み幸福を分ちて良好なる家族を有するとを勉めよ

四、汝は最下等の人にても單に汝の召使ひ奴隷として取扱はすして汝の監督を受けつゝ一般の目的の爲め

生しある人として見做し其の如くに交はるに於ては尊と爲すを得るとを知れ

五、奴隷は德を知らす德とは理性の永久法律に從ひて常に行爲するの勇氣を云ふも奴隷は勇氣も理性も如何なるものなるやを知らす

六、汝か良き信切なる僕をして汝及汝の家族の爲めに盡す其身の如くならしめんと欲せは汝の賢き行狀に因りて之を敎育し固く汝に繋ぐへし

七、僕は汝に均しき人間なれば決して心なきの器械忍堪を知らざるの動物と取扱ふとなく汝が情の奴隷たらしむる勿れ

八、神が汝に對し給ふが如く汝は婢僕に對せよ寛大に愛を以て撫し愛を以て罰し時には又愛を以て賞めつゝ

九、彼等を雇人他人として見做すと勿れ汝が豪慢なれば彼等の抵抗心を增し汝が不信なれば汝に對する信用を失ふ

十、汝が養ふの子の如くに取扱ひて其幸福を造り與へよ

十一、汝が汝の子供の尊敬と心服を收めたるの溫情を以て汝の婢僕の畏敬と心服を收むるを得

十二、誡りつゝ父の如くあれ然りと雖ども其度を過さば汝は汝の威嚴を失ふなれば婢僕の相談相手ともなり時には守護人ともなる樣信認を得るとを求めよ

十三、汝が弱點を示すあらば尊敬を失ふぞ

十四、若し罰すべき時は情に制せられずに眞に之を對せ

十五、瑣細なる過失を見るも每に之を尤むると勿れ同一の事を再復すれば遂には慣れて噫亦たかと云ふ念を生ず

十六、汝が一度譴責したるとあれは之を再び他の機會に操返すとと勿れ汝が心に不滿なるあらば之れを忘

れよ

十七、罰するよりも奨勵したり、物品を以て賞したり、喜を與へたりして、忠勤の情念を惹起せしめよ恨みは恨を生ず

十八、賞すべきあらば直ちに之を賞せ汝の口より出づる賞辭は金よりも貴重なるとあり

十九、假令贈物は粗末なるも汝が彼に與ふるの喜は汝の滿足と汝の愛を證明し、彼は之が爲めに汝に負ふ處を生じて汝の與ふたる物品は數倍の利子を汝に收むるに至らん

二十、汝の婢僕をして虚言を忌む如くにして宗教心を喚起せしめよ

二十一、汝自らか宗教を嫌ふあらば汝の婢僕は汝に心服する能はさるべく又た忠實なる婢僕たる能はさるべし

兄弟と婦人

諺に曰く兄弟は一塊の肉、婦人はこれ刀鋸さは其の宛割に任するを云ふ、兄弟は一釜の羹、婦人は利を輕して言寡く思ひ多くして怨み少ければ人家の災害をなさゞるに幾し(閨範)

社交一斑

流行の栞

流行子

流行袷着男物

(一)上着は市樂諸糸緊き淡色みじん羽毛目か又は紺地の大名萬筋或は光輝織の淡色小紋形等最も流行し又は流行せんとする傾向あり其下着は大島紬の綛りもの最も好しかるべく又は七々子小紋染縣房地の荒木大名子持筋等最も通人的適當なり

(二)上着は結城紬及び節糸の紺地に淡鼠の大名萬筋及千筋等にして其下着は米琉球の絣か綛り糸織の亂立か或は細かき更紗七々子等隨分面白かるべし

(三)瓦斯双子の紺地に白の大名御納戸地に薩摩筋變胡摩柄淡鼠のみじん

等平民的流行さすべし

同　羽　織

先づ紋付より記すれば七々子羽二重市楽の黒の三ツ紋及び五ツ紋の單仕立にして縞物は市楽の淡色みじん類或は縞染七々子若しくは市楽の繋き糸織の鐵無地又は大島紬絣の單仕立て等昨今の大流行なり

婦　人　用

(一)例により京御召の紋織にして其柄は割山椒、吹雪、家根板、海鼠、角通し、木賊、竹崩等にして其下着は同地質にして變りし柄か鼠の紋鹽瀬或は古代更紗の大形を胴抜き仕立にして合せば優美高尚にして流行に後るゝの憂なし次に令嬢向きは上着矢張紋御召又は光輝織にして其柄は海老色の崩し、山形古代茶の手綱、斜め利久鼠の草模様、同色の夏菊に卍（まんじ）古代茶の矢翔、同色の三わくに唐草海老茶の立わくに矢筈、紫紺の崩絣、淡藤の紅葉、鐵色の立矢、紺地井び矢、鐵色の崩し小形、藤色の尻尾崩の菊、紫紺鹿の子紅掛けの崩矢等最も嶄新の珍柄にして其下着は淡白なる友仙の紋壁か、或は古代模様の色鹽瀬、又は亂菊牡丹形の更紗を胴抜き仕立にして合せば高尚にして且つ可憐なり

(二)縞御召にして其柄は紫御納戸紺紫紺鐵色地の矢絣類及び亂立子持ち筋最も流行下着の内にして撰まば誤りなからんか

(三)新糸織にして其柄は前記の御召と大差なく次ぎは銘線節糸織秩父中縞の立縞大ひに好しさす

同　羽　織

(一)婦人の袷時代には餘りに羽織を着さる樣なれど前記の高等物の上に羽織には令閨向には黒縮緬の三ツ紋、五ツ紋(無論單仕立)等なり令嬢向きには濃藤御納戸、青竹、利久鼠及び紫紺の三ツ紋最も流行の樣なり　（以上白木屋報）

古歌と兵法

太田道灌嘗て師を下總に出しゝ時、敵、對岸に陣を構へ寄らば撃たんと待ち構へぬ、味方は潮干たらば押し渡らんこと易けれど滿潮渡りがたし、潮の干滿如何時宛も半夜、道灌いざ見て來らんとて自ら馬を乗り出しけるが忽ち潮は已に干たりさて軈て三軍を押通しぬ、これ

「遠くなり近くなるみの濱千鳥



なく音に潮の滿干なぞ知る」

との古歌を想起し、今しも千鳥の聲遠く聞ゑけるをもて其干潮を推したるなり、又利根川を渡らんとするに闇夜淺瀬を知るに由なし、道灌忽ち

そこひなや淵やはさわぐ山川の
　あさき瀬にこそあだ波はたて

との古歌を思ひ出し、波の荒き所を指て難なく淺瀬を渡しけるとぞ

雜錄

婦人の世界

東洋の日本ならで世界の日本と云ふ時節、世界の婦人達は何事をなしはた何如に思ひつゝあるかを或は家持に或は學問に閑なき我姉妹達に告げ參らせむと、此一欄を設けぬ。

◎米國婦人　最近の調査によれば合衆國に名を知られたる婦人六百三十三名あり。内尤も多きは文人記者にて三百二十名、次は畫家彫刻家にて九十一名、次は俳優歌者にし七十三名、次は敎育家にて六十八名、次は博愛事業家、宣敎師、醫師等あり。此内大學を卒業したる者僅に十九人。また右六百三十三人の内結婚未婚の割合は、恰も相半すと云ふ。左れば米國にては女子大學はあまり名高き人を出さず、また結婚は必ずしも名高くなるの妨にあらざるを見らるゝなり。

◎歐洲婦人の貞節　歐洲婦人の貞節尤もすぐれしは、露西亞、セルヴィア、ブルガリア、モンテネグロの諸國なり。獨逸にては男子の婦人に求婚して斥ねつけらるゝ度數佛蘭西男子に七倍し、和蘭墺地利は四倍すと云ふ。獨逸コエッチル博士の調査にかゝる。

◎葡萄牙皇后　は醫學の熱心家にて、閑を偸むで醫學を勉强し、最早第二年期を終りて倫敦大學の試驗委員の前にて難なく試驗を終へたり。醫學士葡萄牙皇后と稱することも近きにある可く、皇后にして此稱を兼ぬる者古來未曾有なり。

◎珍らしき遺命　露國オデッサ港の一老人此程死に臨み四百萬ルーブルの金を貧困なる四姪に遺しぬ。併し俄かに金持になりて驕らむことの氣遣ひなれば、其金を渡す前に四人の姪に十五ヶ月間洗濯女または下女または百姓仕事を爲す可き旨を遺命しぬ。四人は下女奉公に出でけるが、右の評判を傳へ聞きて、結婚を申込みたる男已に八百六十三人なりとは、仰山ならずや。

◎婦人と新聞　新聞事業の尤も盛なる米國にては婦人の新聞記者も隨分多きことなるが、此事業は婦人にとりて中々骨の折れるものにて、從て報酬も少なからず。年俸五千弗の收入ある婦人の編輯長は先づ頂上にて、大抵は二千五百弗乃至三千弗を常とし、一週五十乃至六十弗も受くれば滿足す。また新聞雜誌の一方面を受持つ婦人は、一週十五弗乃至四十弗を受く。勿論此は毎日午前九時半より午後四時五時まで出社する定めなり。

吾が友藍水子を追惜す

乙未の孟夏、征清の役終るや、余社命を帶びて燕京に赴き、居ると月餘、親友淺野藍水の訃音に接す、驚愕悲嘆、客舍樓上、茫然自失するもの、實に一晝二夜。回顧すれば、余が初めて藍水と相見しは、明治二十年九月京都同志社入學の當時にして、爾來、講學を共にし、寢食を共にし、意氣相投じ、肝膽相許すもの、玆に七年。螢雪研磨の功、終に空からず、普通科卒業の當時、同級五拾餘名の首席は、光輝を放ちて、忠實なる彼を迎へき、時に、明治二十有六年六月、彼れは、直ちに、同志社理科大學の門に入りぬ。

越へて一歳、征清の事起り、余、筆を載せて、皇軍に從ひ、山東の各地に轉戰して、金州城に歸るや、恰も

鄕信に接す、讀めば即ち、親友の彼れが遠征を報ずるの書なり。且つ驚き、且つ喜び、讀んで、彼れが雄心勃々、南の方、澎湖島に向はんとするに至り、一度は、手を拍て、其行を壯なりとし、再び退きて、蠻烟瘴霧の彼が躬を犯すなきを祈りき。以後戰雲漠々貔貅東西に馳せ、艨艟南北に走り、勇猛なる混成枝隊が、外、蠻軍を破り、内、虎病と戰ふの間、彼れは、從容として、終始隊中に在るを聞き、聊か余が心を慰めたりき。

然り而して豈に料らんや、澎湖平くの後、彼れ、枝隊と共に、征臺の途に上り、具さに、人生の困苦、悲慘、缺乏を嘗め盡くして、終に基隆の陣營に病沒せんとは。彼れ享年僅に貳拾貳。先きには。机を共にして燈下に讀書を競ひしもの、今や、幽明相距て、、永く、相見るを得ず、吁嗟悲哉。

人或は彼れを評して、凡庸なる讀書生と爲す、蓋し皮相の見のみ。彼れは、才學共に敏、忠實にして、而かも勤勉なる好青年なりしなり。百家の書を繙きて、百科の學に通ずる、學生の好摸範なりしなり。家庭に在りては、從順なる孝子、學校に在りては、篤實なる生徒、社會に在りては、忠勇なる臣民たらんとするは、彼れが畢生の希望にして又實踐せし所なりしなり。繪畫に巧に、筆記に長じ、行文に速かなるが如き、些々たる能事を以て彼れに擬す、是豈に彼れの本領ならんや。聞く、彼れ、澎湖、臺灣の間に在るや、正に基き、義を守り、公務に服する最も忠實、長上に事ふる最も鄭重、朋友と交はる最も眞率、公私繁劇の傍ら、尙ほ克く、土語を學び、日記を誌し、常に緊急の事變を錄して、我が社に報ずるを怠らざりしと、藍水の藍水たる處、實に、此處に在り、

皇天何ぞ無情！徒らに俊敏有用の才を蠻烟の内に沒せしむ、實に是れ人生の大恨事也。

基隆の軍用墓地に一墓標あり、記して
混成枝隊附英語通譯官淺野源次郎之墓
と云ふ、之れ、生前、鋭敏なる理解力と、聰明なる判斷力と非凡なる記臆力と、忠實なる義務心の化身として、同窓、幾多の英才を後に、瞠若たらしめたる藍水の遺骨を埋むる處なり。余は、彼れが、病沒當時の心情と、彼れを生育せし父母の心事と、彼れと、前途を樂みし、親友の悲愛を推察すれば、幾度び、熟慮するも、「藍水瞑す可し」の語を發する能はず。

威海衛陷落の一周年　東京國民新聞社に於て

笠　麓　生

歌人の頓才

凡そ三十一文字に心得ある人は紀貫之の名を知らざるものなからん、其の古今和歌集の撰を見ても、其の歌道精通なるを見ても、慥に歌仙の一人たるを知らん、貫之始め實定と稱しけるが、當時大歌人として芳名大内に匹なきより百官之を妬み、實定に耻辱をば與へんとしけり。

一日實定勅命に應じて參內しけるに、宮中間每〳〵に低き簾を垂らしありければ、實定簾下を潛みて進み行くはづみに、冠簾にかゝりてハタと落ちけり、此有様を打見やりて殿上の人々如何に實定勅命なるぞ一首詠むべしと呼ばはりければ、實定少しも臆したる景色もなく直ちに其聲に應じて『今日よりは君、貫之と仰せあれ、紀の實定の冠落して』と斯くなん詠じけり、此頓才に諸公卿も感じ合ひ、實定も是より貫之と改稱したり。

次も亦頓才に係る譚なり、細川幽齋、里村紹巴の二歌人聚落の第に伺候しけるに豐太閤二人の詞藻を試みん

と唐突に『立つにたゝれず居るも居られず』といふ下の句を出し、之に適ふべき上の句はとありしに紹巴直ちに『足のうら爪の尖りに物出來て』とつけたり、紹巴の句面白からぬにはあらねど、理に落ちて風雅の趣に乏しとて幽齋『羽ぬけ鳥弦なる弓に驚きて』と詠じたり、太閤うなづき又もや『丸う四角に長う短う』といふ難題千萬なる下を句を出されたり、紹巴取敢へず『丸盆に豆腐を入れて行くちんば』と上の句をつけたるに幽齋汝の附句はいかにと問はれ、左樣に候、これも雅致に乏しき嫌ありとて『筒井つゝ月つりあげる箱釣瓶』とつけたりと以て歌人の頓才を見るべし。

名和長年約束の松（口繪のゑとき）

柳澤淇園の雲萍雑誌に記せり。

名和又太郎長年は、その父嚴にして敎訓の屆きたる人なり、をさな遊びの交りも見らに契約せしとは、正しく守りて忘るゝことなし、ある時、牛を引きたる童の、唄などうたひて通りければ、長年はあと追ひ行きて、童を呼びかけいひけるは、我を其の牛に乘せて、川端まで行けかしといふに、童、うけがひ答ふるやうは御身を乘せて行くべきが、賃には、何をか賜はるべきぞといへば、長年は、わが家を顧て門に生いたる松を指さして何れの樹なりとも、其方が望みに任すべし、とく〳〵、やれといふに、童喜びて、長年を川端まで乘せ行きたり、その後、三とせが程を經て獨りの男、童を伴ひ、長年が家に來りて長年が父にむかひ、三とせ以前の約束を、物語りければ、長年幼心の戯なれども、かの童は、これを誠と心得、牛に乘せたる賃を求めけるに、いかに、いひ解きても肯んぜず、いかゞせんといへば、長年が父、これを聞くよりさもありぬべし、約束をせしにたがひなくば、切らせて遣はすべし

とて、童に望ませ、門前なる大樹の松を、杣に切らせ、牛飼にとらせけり、里人、これを言ひつたへ、名和が約束の松と呼びて今にはなし傳へたり。

夢路の家屋

銑峯女史

名にし負ふ臺灣のこゝは山口附近の一交戰敵は野蠻盲昧の土兵にて神出鬼沒定めなく我が軍隊も詮すべなく志ばしはたゆたひ侍りしが何かは以て恐るべき稜威も高き近衛兵命を棄てゝ戰へり中にも未だ年若き一人の將校陣頭に立ち勢ひ切てふりかざす刄の光りに恐れてかむらがる敵は風前の塵にひとしき木の葉武者にげて行衛は白浪のよする景色もあらざれば。につこと笑みつゝ四方を見まはしかたへなる繁れる木陰に立ちよりて「ポツケツト」より煙草とり出しくゆらし云ひ甲斐なき野蠻共再び嚴敷せめたてゝかり盡し早く大御心を安じ奉り國民に安堵をさするこそ我等が責の本分なり。さなり〳〵とやすらふうちいつしか夢地に入りにけり、、、、、、嚴下に響く鬨の聲すわこそ野兵ござんなれたゞ一戰にほろぼしくれんと立ち上り斷岩絶壁きらひなくふみ越へよぢ越へ進み行き縱橫無盡になぎ拂ひきりまくられて今はや。てきとふ者は嵐だにふく治りて閑靜なり。やがて。めで度凱旋にいつしか歸る我家の門口老ひたる父母は見るよりもとびたつばかりの嬉しさ悲しさ。やれなつかしの我が子やと喜こび給ふ後ろより妻も嬉しの涙にくれあななつかしの我が夫や恙もなくて御坐あれとけふがけふまでいのりし甲斐も。眼のあたりなることそいとも難有けれ平生は御國のために戰場の露と消え行き給ふ事あるも元來覺悟の上なればいかで御歸りを待つべき事やはあると。人々に語はすれど心には何卒して武運つよく勳功を立てゝ御無事

に御歸りをとその凱旋をば一夜を千夜の心地してまつかひありてかく目出度も二たび逢ひ奉る事の嬉しやと日頃積もりし思ひ草云ひたき事を殘し置き。さぞなつかれていますらむねぎろふすべは無けれどもわられは是れより祝宴の仕度にとりかゝらん先づ〳〵日頃待ちわび案じ給ひし兩た親に耳新らしき物語きかせてたべと云ひをきて一人りいそ〳〵くりやの方膳部のこんだて何くれと風呂の水まで湧かしてかひ〳〵しくも日頃よりかはらぬ妻が情の數々難有しと思ふ顏つき見てとる兩た親先づ話頭を開き何を云ふてよきやら分らぬまでにてん倒せり去れどそなたが出陣なせしより家内一同儉約なし下女も子守もひまをやりしより嫁一人りの働きにて家事は勿論内外萬端にくれと忙しき中に我等を。いたはり朝とくよるは。よもすがら腰まで撫でてくるゝなりかほどにつとむる嫁なれば只一言の禮を述べてよと語るも。深きちゝはゝの惠のほど〳〵我が妻の心がけをば感じつゝ互に無事を祝しつゝ折々洩らす笑聲に眠り覺してか今までも晝寢によねんなかりしをさな子が紅葉の如き可愛ゆらしき手もてまなこを。こすりつゝ臥所を出でゝ不審顏に四方を見まはしそれと見るより走りより。あな父上よ。チャンの御土産をたまはれかしと膝にとりつき見上ぐる顏見るよりもいままで張りし勇氣も弛み思はず落つる嬉しの涙、、、、、折しも響く彈丸の音突貫の聲に驚かされてとび上り覺むれば元の木陰なり。あなはかなさや。またも見る事の賴みなき我が故里を思ひあまりて一條のかり寢の夢にてありけるか。我れながら不覺なり女々しき事の限りなりと思ひ直して吸筒に咽喉を潤して軍刀振りかざし戰塲さして馳け行きぬ嗚呼無慘其後數ヶ所に敵兵を攻斬なして勳功もいと著しかりし身も大沽陷河の邊りにて敵の重圍に陥りて不歸の人となりしかば兼て見し家屋も眞に一塲の夢に過ぎずして止みにけり

烈女せん

播磨國姫路市北條口十番地士族高島豊次氏は、去る明治廿五年徴兵適齢となり同地第十聯隊に入り去年四月征清の途に上り凱旋まぢかくなりて、十一月廿五日清國李家屯に於て北邙一片の煙と化しぬ氏の父は小野德太郎とて姫路舊藩士にして、文久年間正義黨に與し同藩士河合惣兵衛氏と各藩の同志と交通して東西に奔走したるは恰も維新の際にして氏の妻女即豊次氏の實母せん女の如きも密かに夫をたすけ彼の惣兵衛氏の割腹の間際まで飲食をはこび、密事をうけつぎしたりとなむ、(後河合惣兵衛氏は特旨を以て贈位の恩典ありき)其後小野氏は家財を抛ち同志の輩をたすけ其力によりて今日迄榮位につきたるもの亦少なからずされど氏は之に誇ることなく只國の爲盡しつゝありしを兎角世事意の如くならず後大坂に居住し明治七年一子豊次氏(時に三歳)をのこして死せり、これより後せん女亡夫の後をつがしめんとて、其生長をたのしみしが交るところの子弟は皆利益の爭ひのみなれば子を教ふるのところにあらずとして、舊里なる播磨飾東郡宇佐崎村にかへりしも遊ぶところ農事の眞似なればとて、再び去て今の處にうつりせん女が平素嗜める琴生花茶道裁縫等を以て家事となし只管教育怠らざりしかば實に孟母三遷の教へと均しく氏も亦よく母につかへ、十二三の頃より同市の渡邊致靜氏につき、文學を修め傍ら擊劍を好みて姫路育英館に入り又鹿島箭五郎氏につき奥儀を極め暇ある折は和樂の笙を好み人をして耳を敲てしむるにより、身を立て老母の心をなぐさめんとするにあたり入營せしが、かねて文武ともに衆に超え品行方正上官の命令に從ふを以て翌年上等兵となり尚は軍曹に拔擢せられんとせしも、老母を養ふ人なければと

て、固辭して受けざりしが日清戰爭に際して、清國大連灣に上陸して以來各地の守備として屯在し勤務に餘念なかりしが凱旋まぢかくなりて敢なくも病の爲に死せしが此報姫路なる慈母せんの耳に入るや其歎き一方ならず、父といひ子といひ共に死を遂げたるのみならず氏に一人の伯父あり河合宗久といふこれも亦維新前姫路を脱し長州に至り、奇兵隊に入り小倉城を落せり後維新の際京都へ上り某公卿の爲に殉死せりといふ、されば今は一族皆國のために死して跡をつぐものなく知ると知らざるとなく、皆老母の不幸を憐まざるなく遺骸の到着するや盛なる葬式を行ひたりとなむ、此頃同氏と元同隊にありし某其不幸をきゝてせん女のために詠みたる歌一首あり

よそにきくわれさへかなしはゝそばの
母のわかれはいかにありける

可憐女

旭の主人

嗚呼本年取つて廿才なる彼女の如何に不便なるとよ。彼女は今や眞の孤女となれり。

余は彼女を識れるより今日までの概略を述べて、彼女の如何に憐むべきかを我姉妹に知らしめんとす。

余の彼女を識れるは彼女の拾壹歳の夏なりき、色白く、目元凛しき彼女の總々したる前髪は、如何に可愛く彼女を思はしめたりしよ、赭顏蓬髮、手織木綿の粗衣を纒へる乙女子の間に雜はりて、村の校にと往き來ふさまは、恰も孤鶴の雞群中にあるが如く、此時よりして既に佳人の名は閭閻に隱れなかりき。

若しも才子多病佳人薄命の語をして眞理あるものたらしめば、彼女の薄命は實に天なりと云はざるべから

ず。
彼女は九歳にして其母を失へり、未だ甘露の如き慈母の情けを味ふと能はざる內に、されば彼女は折々「母の情けの如何なりしものや知り侍らねば、慕かしさもさほどにあらねども、よその人達の母さま〳〵となつかしく冊づき、又母なる人のおのが兒を愛するさまなど見侍るときは、羨しくなりきて、妾もはゝ様あればとそゞろにうら悲しくなりぬとあり」など語り出でぬぞ憐れなりけり。
彼女は拾三歲の春を迎へて小學を卒へ、後しばらくは裁縫のわざに身を委ねぬ、彼女の父は商人なりき、然れども性卓犖、圍碁を好み、謠曲に巧に、挿花に妙を得、特に隸書は最も其誇る處たりき、今日彼れの遺墨を得んと頗る難しと雖も、氏神の祭禮に翳せる旗幟は、多く彼れの書する所なりとす、彼亦兒女を愛すると深く、ことに從女は彼れの末子にして、才色兩つながら秀たりしかば、其寵愛酷しく、彼の行く所彼女を携へざるはなく、彼女の在る所彼を見ざることはなかりき、彼は彼女のためには八十九十までも壽からんを希ひしなるべく、彼女は彼を百までもと思ひしなるべし。嗚呼何の無情ぞや。
彼は彼女を京都なる女學校に入れんと欲し、十五なる彼女を携へて欲滴る夏山江水濱に遊び、意既に決して用意のためとて、一たび我鄕に歸る間もなく、無常の風に誘はれて敢へなく黃泉の客となりぬ、彼女の喜望は今や絕望となれり、彼女は恰も狐に抓まれたる如き心地せしならん、野邊の送りも濟みて彼女の父は北邙一片の烟と化し去り、新に築ける土饅頭のみ彼女の忘るべからざる一大紀念として長へに殘りぬ。
憂きふし繁き我愛女の生ひ先きを見極めずして、消へて逝く彼れの心や如何ならんと思へども、跡に殘りし彼女の悲歎夫れ如何ばかりぞや、おさな心の未だ浮世

のよしあしさへも知や知らずの巷に父と母とに訣れ、頰み少なき身となりぬる悲しさを、それと言の葉に出しも敢へぬ苦しさは、枕の外に知るものとてはたへてあらざるべし。

彼女に一人の異母姉あり、既に夫を迎へて子女數人を生せり、たとへ眞實の同胞なりとも斯く愛兒のありたらんには、如何に父の忘れ片身たる一人の妹なればとて、充分の保護を加ふる能はざるは人情の免れざる所、まして母を異にせるものから自然彼女を疎んずるの傾きあり、又彼女も異母姉と思へば氣儘も謂ひ難く、我しらず意を隔つのふしなきにあらず、終に兩々の情緒釋然たらざるに至りしは是非もなきことと云ふべし、特に其夫……彼女の義兄は、養父の優雅なる心ばへに似もやらで、はしたなきわざを好み、女子に學問などゝは以ての外なりとて、乃父の許せる、彼女の熱望して巳まざる入學も終に之を許さず、遺憾此上やはあると喞てども、親に等しき兄姉の嚴命忤ひかねてや、縫ひ裁ちのわざにのみ身を委ねて、詫しき月日を田舍の空に送ぬることゝなりたる、彼女の胸中果して如何なりけん、推し測るだに淚なり。

斯くて拾七歲の春も過ぎて、金風蕭殺たる秋の末つ方に至り、彼女は亦もや一の不幸を蒙りぬ、そは緣談のことにてありき、彼女の父は其生前より、吾が愛女の行末を案じて別に一家を起し、其相續者たるべきを彼女に遺言し、且つ許婚者までも定めて此世を去りぬ、彼の彼女を如何に深く愛せしやは、之を以て其一般を窺ふべし、然るに彼沒するの後、兄姉等相謀りて無殘にも、彼の遺產を己れの次子に續しめ、彼女は良緣を求めて他に嫁せしめんと計りたりき、而して彼女は夢にだも之を知らざるなり、されば今や良緣のあるに際し、兄姉は衷心切々速に約成らんことを希望して止まずと雖も、流石良心に耻ぢて自から勸むるまでの勇

氣もなく、不得已親戚某をして勸誘の勞を採らしめたりき、彼女は之を聽きて愕然たりしも、乙女心のさすがそれと明らさまに否みかねて、唯首を垂るのみなりしが、いつの程にや終に約調へられ、最早如何ともすべからざる塲合になりしかば、心大に其非道を憤りつゝも何心なく打過ぎ、愈ゝ結婚の日となりて、親戚縁者の打ち集へる眞中へ道理を含める、人理に叶へる斷言を放出し、色然不承諾の旨を傳へられたりき、列坐の呆然周章如何ばかりなりけむ。

此事ありてより、彼女は愈々益々不幸の淵に沈み、時には新紙に載せられ、又は閭里に謠はれ、四面楚歌の中にありて日一日と心細く光陰を送りぬ、兄姉は厄介者として彼を遇するに至り、親戚は我儘者として最早彼女を顧みずなりぬ、昨年余阪地にあるの際、彼女の送れる書中に曰く

義理ある兄姉に養はれ候身とて何事も思ふに任せず樂しからぬ月日を相送り居候云々申上ぐるも失禮ながら妾はあなたさまを誠の兄上を思ひ御頼もしく存候云々

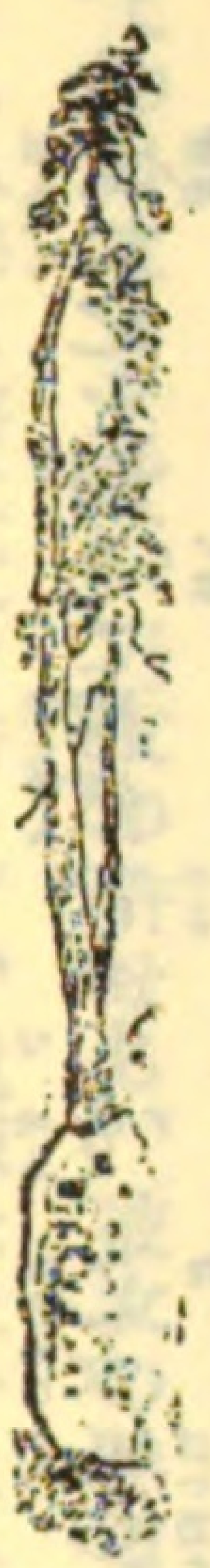
以て彼女の如何に便りなきかを知るに足らん、余は此書を得て終宵寢ぬる能はず、涙を以つて曉に徹したりき。

頃日余病ありて家に養ふ、一日徒然の餘り彼女を其隱家に訪へり、家は亡父の經營する所、實に彼女の棺を出すべかりし所たるなり、今や彼女は斥けられて玆に別居し、中症に病める養母を看護するの傍ら、專ら念佛三昧に耽りて、亡父母の冥護を祈り、又暇あれば好んで稗史小説を讀めり、彼女は拾三歳にして書を擲げたりしも、其天稟の學才は耕さずして頗る豐熟し、今や日用の文書に差支なきに至れるのみならず、大抵のものは之を流讀するさま感に耐へたるものあり、擧止閑雅、言語又明晰、特に人に對して赤心を推し、嘗つ

て其間に虚飾を交へざるは彼女の特性と云ふべし、對話中「妾は最早獨身にて一生を送らんと思ふ」とか又「水臭き兄弟より他人の誠の如何ばかり身に染みて嬉しう覺へ侍らん」など謂へるを聽くたびに、餘が胸は針もて刺されたらん如き心地したりき。

世には雪風寒きあした霜蹈み分けて、薪こることのつらきを喞ち、手足も凍へん寒き夕べに、むきみ賣る悲しさを歎くは多かり、されど彼女の如く富み榮へたる身を持ちながら、斯くまで不幸に沈めるは稀なるべしと思ひ、拙き筆をも顧みずかくはしるして、父母同胞に幸ある姉妹諸君に告ぐることとはなしぬ。

因に曰ふ彼女とは余が鄕里なる某女のとなり、少しく憚る所あれば其姓名を省きつ、讀者之を諒せよ



歌苑

埋火　（松琴生）

降りつむ庭の雪白く　筧の水も音たえて
賤が伏家の草の戸に　あらしさびしくすさぶなり」
うすき光りも消えがちの　榾火のもとにまど居して
父は草鞋をつくりつゝ　母はくるなり糸車」
七歳ばかりの幼な子は　破れし机に打むかひ
かすかにてらす燈火の　影に文よむ聲細し」
つとめよ我子いそしみて　學の友におくれずば
やがてよき衣とゝのへて　帽子もそへてあたへなむ」
父もつくりし草鞋をば　市にひさぎてそこばくの
黄金を得つゝ汝がねがふ　筆と墨とを買ひやらん」
子はうれしげにほゝゑみつ　必すたまへ母さまよ
坊もはげみて來ん月の　試驗に占めん一の席」
答ふる言のやさしさに　たつきのうさも忘れつゝ
姿ながめて行末を　かたらふ樣もむつましゝ」
めぐる車の音しげく　文よむこゑも高らかに
ひまもる風の寒さをも　知らずがほなる樣あわれ」
夜や更けぬらんいざねんと　柴の埋火かきおこし

かろき衾をまとひつゝ　いろりかこみてそのまゝに」
窓に冴ゆく月かげは　靜かにれむる親と子が
ふしどの上におとづれて　たのしき夢をてらすなり」

（水田みづほ）

おやなきまどの竹むら

たちきりて
　杖にしまゐらせと參らせむ
　　たらちねはしも今ははや
　　　今はあのよの人なりな
かわらどさ
　長く契らむかひもなく
　　あはれさびしきまどの竹
　　　うきふししげきまどの竹
よしさらば
　笛にきらむか吳たけの
　　よゝと泣くれにひたすらも
　　　かよふしらべをいかにせむ
さりとても
　せめてそのれのねもしらぬ
　　遠き闇路にいますなる
　　　人にきこゆるものならば」

櫻花十首

（中川愛水）

都の花

そよふく風も芳はしき
　すみだ堤の春の空
見らるゝ花に見る花の
　これぞ都のにしきなる

曉花

曉つぐる鐘の音に
　短き夢やさましけむ
霞の袖をかざしつゝ
　れむげに見ゆる花の顔

月前花

今をさかりと咲みちて
　八重にたなびく花の雲
月のかげみは曇れども
　深き色こそうつるなれ

雨中花

糸よりほそき春雨に
　靡くさもなくなびくなり
袖はぬるとも立寄りて
　一枝折らむ稚子ざくら

糸櫻

野山を裝ふにしきなば
　織出さんとや佐保姫の
春の手染の糸ざくら
　くる人多き花ざかり

山櫻

目もはる山の奥ふかく
　咲きにけらしなさくら花
吹來る風の匂はずば
　雲か雪かと看過さむ

山家花

都は散りてあともなき
　花を見ることうれしけれ
人ざと遠き山が家に
　住居する身の甲斐ありて

水邊落花

しづ心なく吹く風は
　誘はれて散るさくら花

蝶におはれてひら／＼と
川邊に逃ぐるしをらしさ

夜落花

立てる霞を彩りて
咲匂ひたるさくら花
夜の間の風に散果てぬ
惜む人には見せじとて

殘　花

二枝三枝みやま路に
散殘りたるさくら花
春をうたひしうぐひすの
古巣にかへる志をりにや

（同　人）

早　梅

うぐひすにことづてよせんわが宿に三つ四つ梅の咲初めぬると

（同　人）

春の空

花といひ霞といへどすがたにて春のこゝろは空にこそあれ

（同　人）

夢中花

仰見る空に心に塵もなし夢にぞ花は見るべかりける

（水田　みづほ）

春風春水一時來といふこゝろを

氷とけながるゝ川の青柳に吹くともなき風なしる哉

（同　人）

古　井

すみなれしにはの筒井のなはつるべくまるゝものはあはれなりけり

（同　人）

雨中柳

うすらひのあさもきはにし川柳うちけぶるなりはるさめのいろ

（東京　村瀬延子）

山家皆梅花

山里の賤が家毎の梅の花つくらぬ枝も面白きかな

（同　人）

浦　霞

かな路行く車の烟立そひて霞こめけり竹柴の浦

（同　人）

歸　雁

別れ行く都はさこそおしからめなく／＼歸る春の雁かね

（同　人）

小野小町

昔見し夢やさむらむ闇寺の身のあかつきの鐘の聲に

（同　人）

對花思昔

共に見し其昔も思ほへて花の涙も種となりけり

（東京　酒井恭子）

社頭鶯

咲にほふ梅のみやゐは鶯もかみのみまへにうたさゝぐらん

（同　人）

山家春雨

木のめはるかたやまさとの柴のとをまつかにたゝく春の雨かな

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　金子佐治郎
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式合社秀英舍印行